キャットフレンドリークリニック実現へのガイド

isfm

Cat Friendly Clinic

Boehringer Ingelheim　Ceva　IDEXX　ROYAL CANIN　zoetis

www.icatcare.org/veterinary/

international cat care

www.icatcare.org

isfm

国際猫医学会

www.icatcare.org/vets

Boehringer Ingelheim www.boehringer- ingelheim.com

Ceva www.ceva.com

IDEXX www.idexx.com

zoetis www.zoetis.com

ROYAL CANIN www.royalcanin.com

isfm

www.catfriendlyclinic.org

ISFMとはなんでしょうか?

国際猫医学会（ISFM）は慈善団体であるインターナショナル・キャット・ケア（www.icatcare.org）の獣医学部門で、猫の健康と福祉に関心を持つ獣医師のための国際的な非営利組織です。ISFMは、猫のケアをし、実用的な情報やヘルプ、サポートの提供に重点をおく獣医師のための組織です。ISFMの獣医師メンバー（www.icatcare.org/veterinary/isfm/vet-membership/を参照）には現在以下が提供されています:

- 猫医学と外科処置に関する 毎月発行のジャーナル（*JFMS*）（印刷版とPDFファイルのダウンロードで提供）
- オンラインの臨床ピアツーピアディスカッションへのアクセス
- 毎月開催される臨床ウェビナー
- 各種コンフェレンスやアクティビティ、マテリアルの割引

ISFMは、動物看護師や助手の方々向けに異なるメンバーシップを無料で提供しています（www.icatcare.org/veterinary/isfm/nurse-membership/を参照）。動物看護師や助手の方々には、オンラインのジャーナル、Feline Focus、毎月開催されるウェビナーへのアクセスを含む特典があります。

インターナショナルキャットケアは、すべての猫が飼い猫または野生にであるかに関わらず愛情と理解を持って扱われるよう、猫の健康と福祉の向上に力を注ぐ慈善団体です。インターナショナルキャットケアは獣医師（ISFMを通して）、猫のオーナーやケアラー、また野良猫の猫の世話をする方々と協力して活動しています。

キャットフレンドリークリニックはISFMが着想し開発したプログラムです。ISFMの寛大な通商パートナーであるBoehringer Ingelheim、Ceva、Elanco、Idexx、Royal CaninおよびZoetisの支援を受け、ISFMが運営しています。

ISFM キャットフレンドリークリニックプログラムの公式パートナー

概要 - キャットフレンドリークリニックの実現を目指します!

獣医学の世界において、猫はますます重要な存在になってきています。長年にわたり世界各国で飼い猫の数が増え続け、国によっては飼い犬の数を大きく超えています。

飼い猫の数が増えているにも関わらず、小動物クリニックのほとんどでは猫が過小評価されています。その理由は複雑で、状況によって異なりますが、多くの要素が理解されていません。犬に比べ猫が獣医師の診察を受けることが少ないのは、動物クリニックで猫とオーナーが感じるストレスに原因があると思われます。猫のオーナーの気持ちになって考えてみると、猫をクリニックに連れて行く自体がかなり難儀です。まず猫を捕まえてクリニックに連れて行かなければなりません。これ自体オーナーにとっては大変なことです。そして猫がクリニックに到着したら・・・

- 猫とオーナーはどのような対応を受けるでしょうか?
- クリニックは猫のオーナー独特のニーズを理解してくれるでしょうか?
- 猫専用の待合室や猫専用の診察時間を提供してくれるでしょうか?
- スタッフは猫をやさしく丁寧に扱い、猫を理解し、親身になって接してくれるでしょうか?
- 猫を安心させてストレスを軽減するように応対してくれるでしょうか?

これまでに収集されたエビデンスや公開されたデータを見ると、オーナーが猫を動物クリニックに連れて行かない大きな理由は猫やオーナーが感じるストレスであることは間違いありません。健康診断や病気の兆候が見られる際などは、特にその傾向が見られます。

ISFMキャットフレンドリークリニックの認定プログラムへようこそ。 本プログラムは世界中の動物クリニックを対象としており（アメリカではAmerican Association of Feline Practitionersがキャットフレンドリープラクティスプログラムとして提供されているため、アメリカは除外）、クリニックがこれまでの考え方を変えていく独自のチャンスを提供します。「猫」の立場にたって考え、猫に対する対応や治療、必要な場合は装置や建物を改善し、猫のオーナーに対してキャットフレンドリーな要素を明確に示すサポートをし、猫やオーナーへのアプローチ方法を変えていくお手伝いをします。クリニックを訪れた後にオーナーが次の来院のことを考えて憂鬱になるのではなく、クリニックの対応に感謝し、スタッフが理解を示してくれたと思ってくれれば本当にうれしいことです。

本プログラムではキャットフレンドリークリニックの実現を奨励し、それに向けて必要な手順、臨床面および経済面でのメリットを説明し、明確で理解しやすく、また採用しやすい提案内容をご紹介します。ISFMのキャットフレンドリークリニック（CFC）プログラムには各レベルの認定基準があります。キャットフレンドリークリニックの実現に関心を持たれ、適切に変更を取り入れる意思を持った小動物のクリニックが認定を受けやすいよう設定されています。

よりキャットフレンドリーな世界へようこそ・・・

キャットフレンドリークリニック実現へのガイド

内容

1. クリニックの持つ可能性
2. 患者としての猫
3. ISFM キャットフレンドリークリニック

Kodak COLDLIGHT ILLUMINATOR MODEL 3

1. クリニックの持つ可能性

猫は犬とは異なるものであることを私たちは皆知っています。しかし猫をペット化するプロセスは犬に比べてかなりゆっくりと進んできたこと、また猫と犬は同じ家に住みながらお互いに独立して暮らしてきたことを私たちは忘れがちです。猫は犬に比べてより自給自足にすぐれ、人と触れ合う時期や距離を取る時期を選んでいると見られています。

猫は一般的に、自分の弱さや痛みを隠そうとします。その結果、動物クリニックでは猫の容態を把握するためにオーナーの観察やフィードバックに頼るようになりました。オーナーは猫の微妙な変化に敏感です。ほとんどのオーナーは猫の健康管理のために進んで情報を提供してくれます。犬と違い猫を引き取ることに費用はほとんどかかりませんが、猫とオーナーの絆を弱めることにはなりません。

オーナーの多くは人よりも猫と時間を過ごすことを望み、話し相手として猫を飼っている人が多く見られます。

このセクションでは以下に目を向けます:

- 猫の飼い主の傾向
- 様々なレベルのケア
- ビジネスをもたらす猫
- オーナーによる来院と再来院

猫の飼い主の傾向

多くの国では猫のオーナーは30歳から45歳の女性が大半を占めています。人生のこの時期は家族や仕事からのプレッシャーが大きく、忙しい日々が続き、独立心が強く自給自足の習性を持つ猫はペットとして適していると思われます。さらに現代のライフスタイルや就業状況を見ると、犬の世話は家族や個人にとって負担になりがちです。

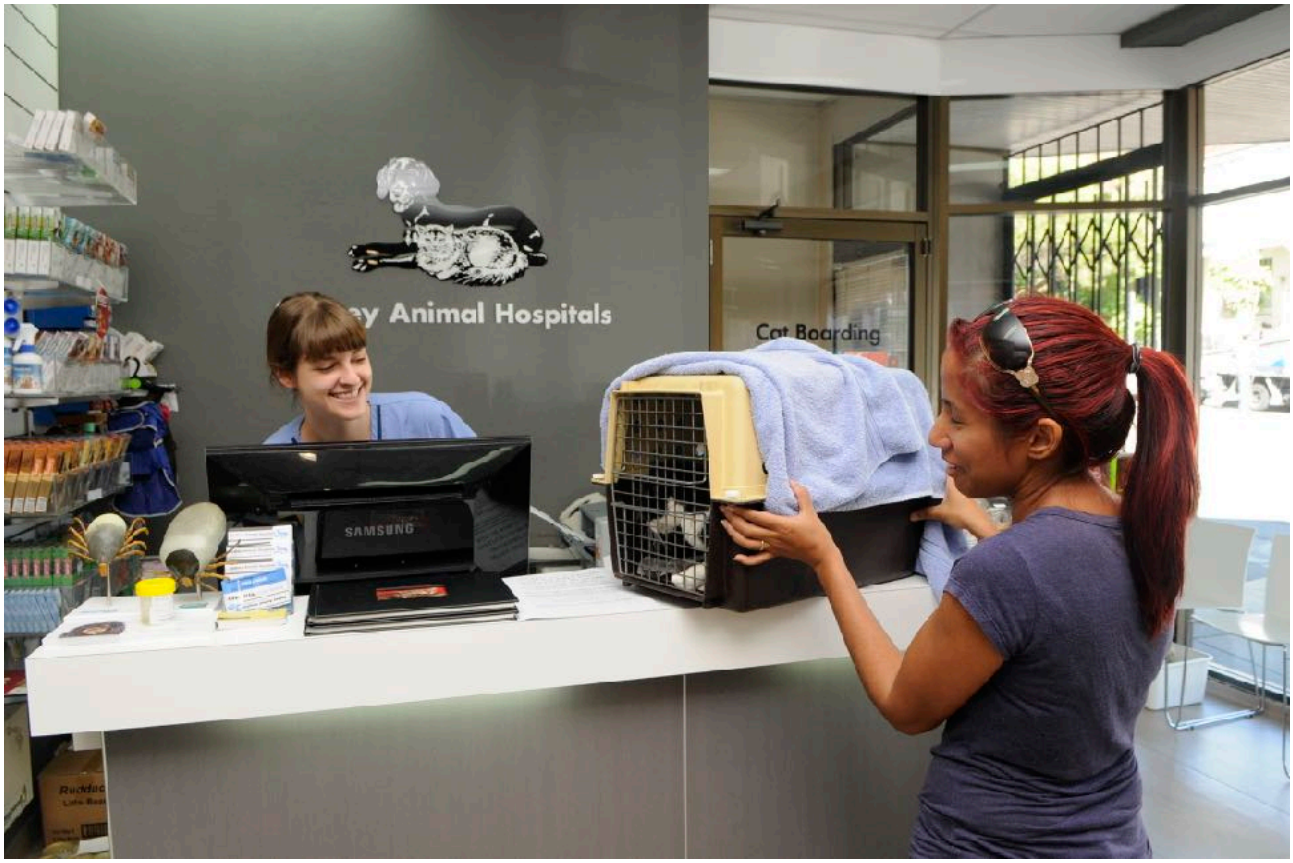
猫の寿命は通常12年から15年ですが、16年以上生きる猫が増えてきています。猫を飼う人が増えているだけではなく、きちんと世話をしてくれる家庭で飼われている猫の寿命が延びているのです。猫を飼う家庭の増加、および猫への対応や求められるものが変化してきたことが、世界各地の動物クリニックに大きなチャンスを提供することは疑う余地がありません。動物クリニックは、猫の生活を健康にそしてハッピーにするために大きな役割を果たしており、これはオーナーとクリニックのつながりを強める真のチャンスにつながります。

様々なレベルのケア

ほとんどのオーナーはきちんと猫のケアをしていると思いがちですが、動物クリニックへの来院には躊躇しがちです。予防治療の場合は特にその傾向が見られます。オーナーは猫をクリニックに連れて行く必要性や理由を理解していますが、毎日の生活の中でその時間を見つけたり、クリニックに行くことのストレスなどを考えて躊躇してしまうのです。私たち自身の中にも見られることですが、きちんと猫の世話をしようと思っているオーナーでさえ日々の生活に流されてしまいます。クリニックへの来院にまつわるストレスを軽減し、より前向きな経験をしていただけるよう努力することで、障害や抵抗を克服できます。

猫のオーナーは社会の中で大きな部分を占め、潜在的な収益をもたらしてくれます。オーナーが猫の健康と幸福のために協力する意思を持ってくれれば、動物クリニックの発展と成長に大きく貢献します。

猫の多くは動物クリニックを訪れたことがないかもしれません。子猫を飼っている多くのオーナーは去勢や避妊手術のためには来院しますが、その後は猫が大病をしない限りクリニックを訪れることはありません。責任あるオーナーとしての自覚がないこと、また単にコミットメントが欠如していることが原因と思われます。また猫をクリニックに連れてくることの困難さ（または予想される困難さ）、診察の間は猫を抱いていなければならないことに対する不安や、猫にフレンドリーでない環境が来院を躊躇させるのです。



ビジネスをもたらす猫

小動物クリニックにとって、猫の重要性は無視できません。猫はたくさんいます！ 血統書付きの猫の数は多くありませんが、適切にアプローチすれば、猫のオーナーの多くは犬のオーナーが愛犬にかける費用と同じだけ、猫にかける覚悟を持っています。猫のオーナーのほとんどはクリニックに求めるものを明確に理解しています。すべてのオーナーはクリニックを訪れた時の経験に大きく影響されるのです。2か所以上のクリニックを利用するオーナーが増えており、ここでは最高のサービスを提供してオーナーが納得するケアを提供する必要があります。

世界の多くの国において、猫のケアに使う年間支出と平均取引額は過去数年間で同じ程度に増加していますが、獣医師の多くは今もなお犬のケア領域の成長を希望しているようです。しかし現実には、多くの国でペット犬の数は一定または減少しています。都会では犬を求めない人が増えてきており、これまで犬がクリニックに大きな収益をもたらしてきたという事実が今後長く継続しないことを明確に示しています。多くの国のデータを見ても、猫のオーナーがクリニックに来院して猫のヘルスケアに費用をかける意欲が示されています。例えばイギリスでは、 猫のオーナーは犬のオーナーに比べて猫の年齢に合った

キャットフードを購入し、蚤取粉や駆虫剤などの予防製品を買う傾向があることをデータが示しています。

人間と同様に猫も高齢化しており、欧州の広範囲やアメリカの猫のおよそ半数が8歳以上で、平均年齢の12歳から15歳を超える猫も増えてきました。これは獣医師が猫の健康管理に携わる大きなチャンスをもたらしています。動物看護師の資格が認められている国では、研修を受けた看護師が猫のオーナーに教育や実用的なアドバイスを提供し、クリニックが提供するサービスの推進に重要な役割を果たしています。

猫が病気になった時に緊急治療を施すだけでなく、猫の健康の管理や維持に携わることは、オーナーと長期にわたる生産的な関係を築くためのはるかに優れたアプローチです。猫の生涯を通じた健康管理をするだけでなく、猫がクリニックにもたらすビジネスを最大化する最善の方法と言えるでしょう。

オーナーによっては推奨されるヘルスケアプランに従わない方もいます。猫の健康管理に最善を尽くすオーナーもいれば、散発的に従ったり、 仕方なく従うオーナーもいるのです。しかしクリニックがその必要性を証明し、オーナーに理解してもらえれば、 お互いに協力して猫の健康や幸福、長寿を叶えることは可能です。ほとんどのオーナーはクリニックからの提案を受け入れ、その方法について話し合う意思を持っています。

ここで重要なことはキャットフレンドリーなクリニックを実現し、クリニックに来院するよう働きかけ、猫独特のニーズに対応することです。

オーナーによる来院と再来院

猫のオーナーに「オーナーとして必要なことをする」ように働きかけるにはどうすればいいでしょうか? 獣医師は、猫が生涯を通して可能な限りのヘルスケアを受けるために何ができるでしょうか? ここでは、クリニックが猫を歓迎して効果的なヘルスケアプランを推進するためにオーナーと明確なパートナーシップを確立することが必要です。猫が病気になった時や緊急の時だけ来院するのではなく、猫が健康で幸せな一生を送るために、獣医師とオーナーに明確なプラットホームを与えることがこのパートナーシップの目標です。

The **Cat Care *for* Life**のプログラムもまた、Boehringer Ingelheim、IDEXX LaboratoriesおよびRoyal Caninのサポートを受けてISFMが 開発しました。 本プログラムは、各ライフステージにおいて猫の健康を維持するための本パートナーシップの詳細な計画を提供します（詳細は www.catcareforlife.orgをご参照ください）。

来院にまつわるすべての要素においてオーナーをサポートし、より効果的に対処することは、予防治療に対するオーナーの考えに大きく影響します。以下はISFMが2006年と2007年にイギリスで実施したキャットフレンドリープログラムとコンペティションに参加したクリニックからの報告です。猫に関する知識や理解の向上が優れた結果につながることが示されています。

> 「オーナーは、予防治療への取り組みにかなり積極的になってきました。これは我々のアプローチが変わったことの影響だと思われます。我々もさらに積極的にオーナーに予防治療を勧めています」
>
> 「我々は猫のニーズを深く理解しています。オーナーも我々の猫への関心と知識を理解してくれており、猫の対応を心得ているクリニックとして知り合いに紹介してくれます」

よりキャットフレンドリーなクリニックの実現は、猫の様々なヘルスケアの提供において、さらに今後のCFCプログラムの発展に向けた第一歩、そして大変重要な一歩なのです。本ガイドでは猫についての情報、 またキャットフレンドリーなクリニックを実現するための実用的な情報を提供し、ISFM認定への申請方法を説明しています。認定を受け

れば、貴クリニックが他のクリニックと大きく異なることを猫のオーナーに示すことができます。

獣医師にとっては獣医学を多少違う方向から見ることが求められるかもしれませんが、競争の高まるこの市場において、猫は間違いなくクリニックの発展につながる道を示してくれます。成長を続けるこの膨大な市場は、前向きな姿勢を持つオーナーに対応し、確固たる努力をして「猫がビジネスにつながる」ことを実証する意思を持つ動物クリニックに膨大な可能性を提供してくれるのです。

2. 患者としての猫

猫とはなんでしょうか? 猫はなぜあのように振る舞い、時に犬よりも対処が難しいのでしょうか? そして素行は猫のケアをする人たちにどのような影響を与えるのでしょうか?

本項ではクリニックでの猫の振る舞い、獣医師や看護師がその振る舞いをどのように予測できるか、またオーナーが猫に関して持っている誤解について考えていきます。猫がストレスを感じると、臨床テストの信頼性や解釈に影響を与えるだけでなく、病気の兆候や治療への反応に大きく結びつきます。猫の家庭環境もまた、クリニックが提供するケアに大きく影響します。

猫は以下のような習性を持っています:

- 小動物を捕まえて食べるハンターおよび肉食獣である
- 縄張り意識が強い
- 周囲のにおいや香りに非常に敏感である
- 自立心が旺盛で感情的、意識が高い
- 幼少期の経験に大きな影響を受ける

猫が何に刺激を受け行動するかを理解できれば、動物クリニックなどの特異な環境での猫のケアも難しくありません。

ハンターおよび肉食獣

猫は齧歯動物や小さい獲物のスペシャリストハンターとして、身体も行動も進化してきました。食物連鎖のトップに立つ捕食動物であり、視覚や聴覚、獲物のにおいに刺激され獲物を捕まえます。ハンターとして成功するために、猫は獲物が動き出し、捕まえやすい夜明けや日暮れなどに縄張り（狩猟範囲）を探します。肉食獣である猫は、肉のみに含まれる多くの栄養素なしには、健康に育ち生き延びることはできません。

これは動物クリニックにとってどのような意味を持つのでしょうか?

- 猫は捕食動物として周囲に適応し、危険を感じた時は効率よく自身を防御します。猫から噛まれたり引っかかれたりして感染するリスクもあります。猫に恐怖心を与えず、猫が攻撃的な防御を取らない方法で猫との衝突を避けることが重要です。
- ベジタリアンフードやドッグフードなど猫に適していない食事を与えると、栄養のバランスがとれず、健康状態に大きく影響したり死につながることもあります。
- 猫と犬は肝酵素経路が異なり、猫は特定の薬剤や化学薬品の毒性に弱く、効果的に代謝することができません。一般的に犬にはこのような影響はありません。

オーナーの誤解を解くためのアドバイス:

- オーナーの希望や倫理的信念に関わらず、猫はベジタリアンになることはできません。猫は肉食獣であり、猫のニーズを満たす食事が必要であることをオーナーは理解する必要があります。
- 猫の食事には厳しい要件があり、家庭で作る食事でそれを満たすことは大変困難です。市販されている高品質のキャットフードが猫のニーズを満たす安全で最善のオプションです（Royal Caninシリーズのキャットフードなど。royalcanin.comを参照）。
- 猫はそれぞれのライフステージで異なった栄養を必要とし、各ステージに合ったキャットフードが最も適しています。
- 子猫は成長するにつれて、ハンティングや獲物を襲う行動を身に付けます。子猫の時に、荒っぽいことをしたり、ふざけて人の手や足を攻撃するような遊び方を勧めると、成長するにつれて人の手や足にけがをさせてしまうこともあります。

- 猫は通常夜明けや早朝に動き回ります（餌をもらったり遊んでもらおうとしてオーナーを起こすなど）。
- 猫は時々捕まえた獲物を家に持って帰ってくることがあります。
- 猫には狩猟本能を刺激するような遊び方が必要です。

獲物を捕獲し、少量の食事を定期的に取る必要性

野生の猫にとって食べることは単に生きていくための行動ですが、獲物を見つけ捕まえることには時間がかかります。そのため猫は一日を通して少量の食事を頻繁に取るようになり、時には夜も食事をします。野生の猫は通常一日に10回から20回食事をします。家庭では猫の食事時間を決めずに、常に食べ物がある環境を与えるのが理想的でしょう。

猫が生きていくためは食べ物が絶対に必要です。母親猫が子猫に獲物を取るテクニックを教える時以外は、猫は独りで獲物を探し、捕まえ、食すことを望みます。猫にとって食事は誰かと楽しむものではなく、猫は独りで食事をすることを望みます。飼い猫は去勢や避妊の手術、また不自然な食生活の影響で、食物摂取の自己規制ができなくなることがあります。

猫が水分を取る習慣を理解することも、水分の十分な摂取にとって大切です。野生の猫は、獲物を食す時にかなり水分を取ります。しかしそれ以外にも水分は必要です。猫は一般的に食べ物の近くにある水は飲まない習性があります。これは腐った肉で水が汚染されている可能性を避けるためです。

これは動物クリニックにとってどのような意味を持つのでしょうか?

- オーナーが猫の食習慣を理解していなければ猫が肥満になってしまいます。
- ドライフードは歯の健康に効果的で、猫が遊びながら食事をすることもできます。
- ドライフードだけ食する猫は水分の摂取量が十分ではありません。病気の症状によっては水分の摂取量を増やすことが重要です。ウェットフードを与えることで改善されます。

オーナーの誤解を解くためのアドバイス:

- 人と違い、日に1度か2度きちんとした食事を取ることには猫には適していません。猫の食事の一部、またはすべてをドライフードにすると、数回に分けて少しずつ食べることができます、パズルフィーダーやボール、おもちゃを使って餌を隠せば猫が遊びながら食事ができ、猫に刺激を与え、一度に大量の食物を摂取することがありません。
- 猫は一度に大量の食事を取る習慣がなく、少量を食べた後にどこかへ行ってしまいます。与えられた食事を一度に食べない場合でも、食事の味や食欲のなさに関係ないこともあります。オーナーが猫の食事をより美味なものに替えると、猫が持つ新しもの好きな習性が出て食事の量が増えることもありますが、しばらくするとまた元のパターンに戻ってしまいます。このような食事の与え方は猫の肥満につながることもあります。
- 猫にとって食べ物の摂取は周りとの触れ合いの場ではありません。猫が足にすり寄ったり声を出すことは周りとの触れ合いを促すサインであり、お腹がすいていることを示すものではありません。猫はこのような行動をとれば食事がもらえることを迅速に学びます。猫との触れ合いを楽しむオーナーは、その報酬として（またはうるさい猫を静かにさせるために！）食べ物の量を増やすことがありますが、食事を与えすぎは猫の肥満につながります。
- 猫は独りで食べることを好みます。複数の猫を飼っている家庭では、猫たちが自由に、素早く、また独りで食べられるように食べ物を何か所かに分けておく必要があります。同じ家庭で飼われている猫が一緒に食事を取るということは、 その猫同士の気が合うことを示していますしかしながら生きていくために食物は絶対に必要であり、いつどこで食物を摂取できるかはオーナーの管理下にあるため、猫は他の猫と一緒に食事を取らなければならないこともあります。食事中はあまりお互いへの敵意を見せませんが、食事以外の場での猫同士のストレスを増加させることもあります。

- 猫に食事を与える場所も重要です。部屋の隅だと食べにくく、キャットフラップの近くだと他の猫が入ってくる可能性もあります。ガラス製のドアの近くだと周りから見られることを気にして速く食べ過ぎることもあり、騒音のある電気製品の近くは猫を怖がらせてしまいます。

縄張り意識の強さ

私たちは「縄張り」と言う言葉を広い意味で使いがちですが、行動を示す意味で使うとすれば猫は縄張り意識の高い動物です。縄張りは猫が通常使うホームレンジ（行動圏）より少し狭く、決まった場所ではありませんが、猫のニーズと要求によって縄張りの広さが決まります。野生の猫が獲物を捕まえ生き延びるためには、ホームレンジと縄張りが整っていなければなりません。猫は通常、自身のホームレンジや縄張りへの侵入者に対して不安を抱え、注意深くなります。ペットの猫はオーナーからえさを与えられますので、獲物を捕まえる必要はありません。それでも猫の狩りに対する意欲は強く、縄張りやホームレンジを強く求めます。

縄張り意識は家庭で飼われている猫の行動にも大きく影響し、希少な資源や、資源へのアクセスに対して猫同士の競争が起こります。また同じ家庭で飼われている猫同士は密接な関係を築くことが少なく、縄張りをめぐって争います。

動物が生き残っていくためにはもちろん生殖が重要です。オスのホームレンジは一般的に、メスのホームレンジの3倍から10倍の大きさです。郊外の家で飼われているメス猫の縄張りは通常、家の庭とその周辺ですが、オス猫の場合は隣接した複数の家の庭もその縄張りとなります。

街中に住む野良猫は楽に食べ物を手に入れることができ、1ヘクタールに猫が75匹以上という混雑した環境に住むことができます。同様の環境に住むペットの猫は、1ヘクタールに120匹以上という密集状態の中で暮らしています。家庭で飼われている猫は定期的に食べ物を与えられ、家の中が彼らの安全な縄張りとなります。猫は家の中と外の様子を同時に見ることができないため、野生の猫と同様ににおいを残します。猫はこすったり、引っかいたり、尿をかけたりと、様々な方法でマーキングしますが、 その方法はマーキングの目的やその時の感情によって異なります。

これは動物クリニックにとってどのような意味を持つのでしょうか?

- オーナーは、猫の縄張り意識の強さと近所の猫に対する攻撃的な態度について、アドバイスを求めることもあります。縄張り意識の強い猫は、他の猫の縄張りを横取りしようとしたり、他の猫が自分の縄張りに入ってくることを制限したり、また完全に追

い払ってしまったりします。猫によっては広範囲に渡る複数の家の中に入り込み、そこで飼われている猫を攻撃し、その猫のオーナーが止めようとすればそのオーナーも攻撃し、尿をかけてマーキングすることもあります。

- そのような攻撃的な猫に襲われて怪我をし、オーナーに連れられてクリニックに来る猫もいるかもしれません。このような場合、実際の怪我に加えて突発性膀胱炎などのストレスが原因となる症状が見られることもあります。同じ家庭に飼われている猫同士の対立は、しばしばストレスの原因となります。
- 猫は縄張り以外の場所では不安を感じます。クリニック内のにおいや音、目に入るものが猫をさらに不安にし、怯えさせ、防衛的にします。

オーナーの誤解を解くためのアドバイス:

- 猫にとってはオーナーとの結びつきよりも縄張りとの結びつきが強い場合も見られ、新しく住む家が前の家の近くであればその家に戻ってしまうこともあります。
- 猫が同じ家に住む猫を容認しないこともあります。オーナーは猫が寂しくて友達が欲しいだろうと感じるかもしれません。しかし猫は自分に関係のない猫、また自分の社会集団に入っていない猫に対して大きな脅威を感じることがあるのです。家に来たお客さんが猫を連れてきた場合、そこに住んでいる猫をひどく動揺させることもあります。
- 縄張りに対する脅威から危険を感じたり、けんかをしたり、隠れてしまって外に出てこない場合もあります。オーナーは猫が危険を感じていることに気づかないこともありますが、これが原因で猫の行動が変化したり、ストレスに関連した問題が起こることもあります。
- モダンなキャットフラップを使用すれば猫の出入りをコントロールすることができますが、他の猫が入ってくる可能性もあります。家で飼っている猫のみが使用できるキャットフラップが理想的です（例：マグネチック、電子式、マイクロチックの「キー」を使用など）。キャットフラップは、猫の縄張り内の安全な場所から、より危険をはらんだ外の世界への通り道です。猫の中には家の中の一部のみを縄張りにしている猫もいます。
- 縄張りが家の中などに限られている場合は、猫にとって刺激的な環境をつくってあげることが必要です。室内での猫の縄張りはベッドの下などが多く、 ドアの周りなどは安全ではありません。加えて室内の高い位置にある場所は、猫が休める安全な縄張りになります。

- 猫が家の中でマーキング行為をした場合は（スプレー行為、排尿や排便、引っかくなど）、猫が安全を感じていないという合図であることも考えられます。
- 猫は自分からホームレンジを出ることはあまりありません。オーナーが猫をホームレンジから出さなければならない場合は、猫のニーズに敏感になる必要があります。猫を預ける場合には、猫の行動を理解してくれる預かり所や、猫のニーズや不安を理解してくれるキャットフレンドリーなクリニックなどが適しています。

においへの敏感さ

猫はにおいを使って周りコミュニケーションを取ります。友達を探したり縄張りをマーキングしたり同じグループの猫を探す場合を除いては、他の猫を寄せ付けないためににおいを利用します。顔や身体の腺から分泌するフェロモンを使いますが、尿や便を使う場合もあります。

猫の唇やあごの周り、頭の上、しっぽの先、手の指の間、お尻の周りなどににおいの腺があり、猫がオーナーに顔を押し付けすると、このあたりから猫独特のにおいを発散します。同様に、縄張り内にある小枝や大きな枝、その他のものにもマーキングします。猫は

また、木や塀などで爪をとぐことにより、目に見えるマーキングと指の間の腺から分泌されるにおいのマーキングを残します。オス猫の尿は刺激的なにおいを残します。

すべての猫は性別や去勢および避妊の状況に関係なく、スプレー行為などでにおいのマーキングをしますが、スプレー行為の頻度や方法は複雑です。糞に土をかけずに目立つ場所に残し、におい付けのマーキングすることもあります。

食べ物が豊富にある野生の環境やファームなどで「自然にできる」猫のグループは、一般的にお互いにフレンドリーで、体をこすり合ったり相手の警戒を解こうとする行動でお互いの絆を示し、メス猫は協力し合って子猫の世話をします。猫は体をこすり合うことでにおいをつけ、グループとしてのにおいを生み出し、そのにおいによって同じグループ内の猫を認識します。自然にできたグループ内では攻撃しあうことはほとんどありませんが、グループ外の猫が侵入しようとしたり縄張り内で獲物を捕まえようとすれば、グループのメンバー（通常関連のあるメス猫同士）は自分たちの食べ物やその他のリソースに対する脅威を感じ、極度の攻撃性を見せてその猫を追い払います。

これは動物クリニックにとってどのような意味を持つのでしょうか?

- マーキングなどの問題行動はよくあることですが、詳細を調べてオーナーに効果的なアドバイスを提供するには時間がかかります。基本的なアドバイスをしても猫の行動が変わらない場合は、猫の行動に関する専門家への照会（またはスペシャリストからのアドバイス）を考慮します。排尿に問題がある場合は尿検査をして、健康面の問題がないかを確認することが重要です。
- クリニックには猫が慣れているにおいがしないため、猫の不安が高まります。
- 次の猫を診察する前に手を洗ってテーブルを拭くことは衛生面からも重要ですが、前の猫のにおいを消す役割も果たします。
- 入院の際には、猫が家で使っていて自分のにおいがしみ込んだブランケットなどをオーナーに持ってきてもらえば、猫のストレスが軽減されます。猫のキャリアにもその毛布を使えば同様の効果が得られます。
- 家庭内またはクリニックで合成のフェイシャルフェロモンを使用すると効果的です。
- 強力な消毒剤のにおいは刺激的です。ケージを消毒した後は十分に洗い流し、乾いてから猫をケージに入れてください。

オーナーの誤解を解くためのアドバイス:

- 猫はまずにおいから食べ物を判断します。美味しそうなにおいがしなければ食べようともしません。猫が上部呼吸道感染症などにかかると臭覚が衰え、食欲が無くなりま

す。脂肪分が多い食べ物や体温まで温めた食べ物のにおいは、猫の食欲をそそります。

- においの異なる家庭用洗剤や防臭剤を使ったり、新しい家具を入れたり、家に来たお客さんが犬を連れてきたり、キャットフラップから他の猫が入ってきたりして、猫が慣れ親しんだにおいに変化が起こると問題につながります。猫の行動に問題がある場合は、猫を取り巻く環境の変化を理解することが大切です。
- 猫が室内でマーキングをするのは、猫が「汚い」からではなく、猫の感情面が変化したことを表しており、猫が脅威を感じた時に起こりがちです。新しく来た猫への反応、または環境の変化への対応に困難を感じていることなどが考えられます。
- オーナーはしばしばマーキングを粗相と勘違いしたり、その反対の場合もあります。

生まれながらのきれい好き

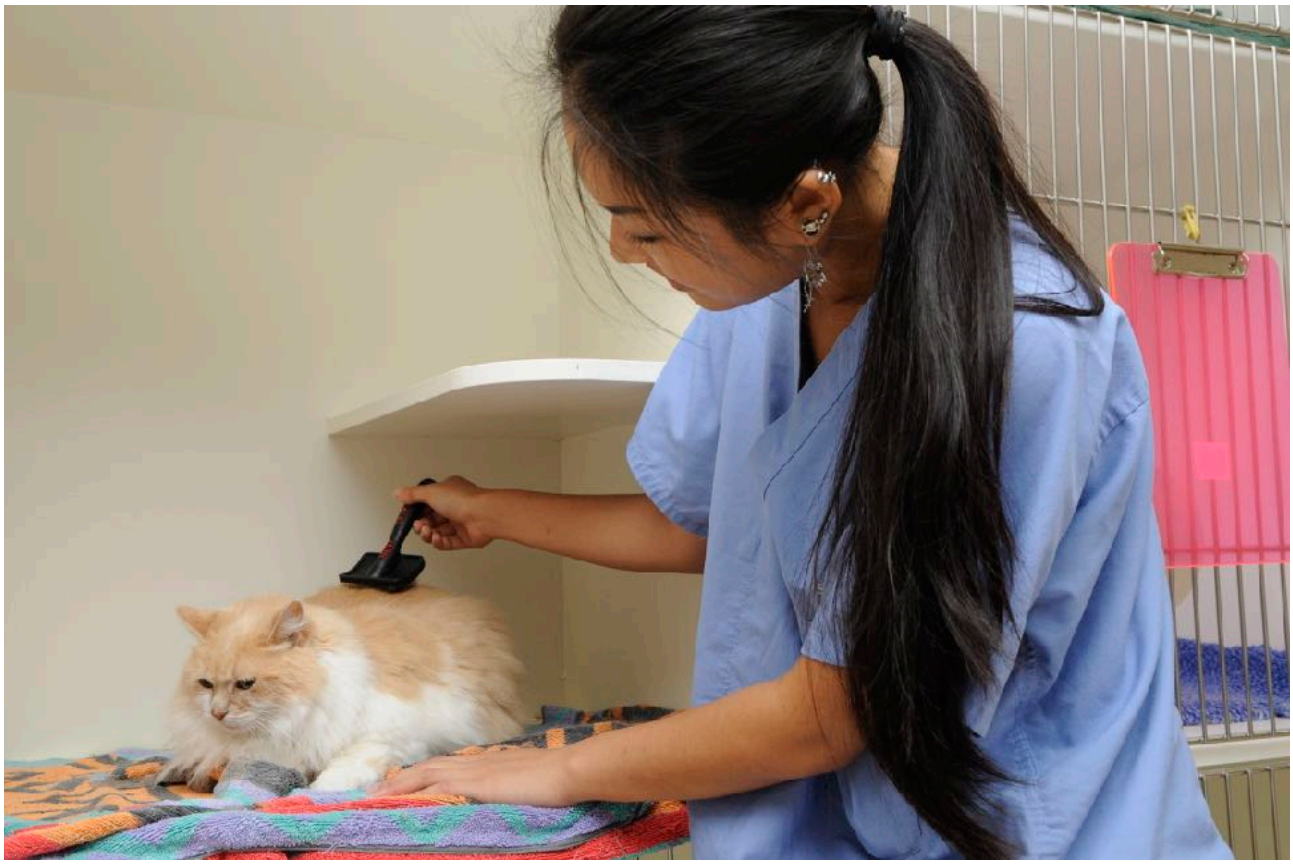
猫は人生の4%（または起きている時間の8%）を毛づくろいにあてます。毛づくろいは猫にとって大変重要です。猫は補足動物です。狩りをして獲物を追い詰めるために最高のコンディションを保たねばならず、自身のメンテナンスは重要です。毛づくろいをすることで、寄生虫や、毛並みの質を落としたりにおいをつける物質を取り除きます。猫の毛は周りの動きにも大変敏感で、周囲の環境や風の方向などを猫に知らせます。毛づくろいは仲間との関係を維持するためでもあり、親和行動の役割を果たします。その潔癖な性格から、猫は毛についた毒性のものを舐めてしまうこともあります。普段は絶対に口にすることのないものです。猫は尿や糞でマーキングしますが、それらを埋めることによって自分の居場所を隠そうとすることもあります。人にとって猫は、共に快適に過ごすことができる相手です。においもあまりせず、必要な場合はちゃんと猫用トイレを使うことができます（トイレのにおいはオーナーが頻繁に洗浄することで防げます）。

猫は尿や糞を埋める習性がありますので深めのトイレ（ただし深すぎないもの）が適しています。大きな植木鉢などが猫のトイレとして適しています。猫は排便用に深さ1センチから3センチのトイレを好むというリサーチ結果も出ています。同様に、庭の土が固い場合や土がない庭よりも、 穴の掘れる庭や砂利をきれいに敷いた場所をトイレとして使用することを好みます。猫は柔らくてならし易い物質を好みますので、トイレの土は粘土製などがいいでしょう。

猫には、狩りや食事やその他主な活動をする場所から離れたところで用を足し、尿と糞には別々の場所を使う習性があります。オーナーは「猫の数プラスワン」というルールに従って猫のトイレを用意し、また食べ物の容器の隣に置いたり、大通りの近くに置かないことも大切です。ひっそりとして静かな場所が理想的です。

猫が猫用トイレ以外で用を足す理由には、以下が考えられます:

- 幼少期のトレーニング不足
- 好んで用を足していた場所でできなくなった場合
- 他の猫からの攻撃
- 家の中に複数の猫がいることからのストレス
- トイレの位置や砂、またはトイレそのものに対する嫌悪
- トイレに関する不愉快な経験（トイレが汚い、トイレを使っている時に大きな音が聞こえたり邪魔をされる、薬を飲まされるなど）



これは動物クリニックにとってどのような意味を持つのでしょうか?

- トイレの問題は病気にもつながります。猫が尿や糞をする際に痛みを感じると、その行為そのものではなく場所に関連付けてしまうことが多々あります。高齢になると関節が固くなったり痛んだりし、動きが鈍くなります。以前は好んでいた高い囲み板のついた深いトイレなどの場合、年を重ねると板を乗り越えるのが困難になります。
- 毒は、飲食よりも毛づくろいによって体内に入ることがよくあります。
- 毛並が整っていない猫はきちんと毛づくろいができないか、毛づくろいをしたくないことを示しており、歯の病気や変形性関節症、認知機能障害、甲状腺機能亢進症、不安症の可能性も考えられます。
- 毛づくろいは気分を落ち着かせたり満足感をもたらす効果もあり、また転位行動としても使われます。
- 猫はトイレから離れたところで食べたり眠ることを好み、病院のケージの大きさや小物の配置は猫の食事や環境に影響します。
- 猫によっては特定タイプのトイレ（カバーのあるものやないもの）を好む場合もあります。

オーナーの誤解を解くためのアドバイス:

- 猫にとって排尿や排便に快適な場所とは、楽に穴を掘ったり掘り返したりできるところです。砂が重かったりざらざらしていたり、また馴染みのない固さやにおいがする場合は利用しません。猫用トイレは、猫があちこち嗅ぎまわったり、楽に排泄物を動かしたり、排泄物をよけて通れる大きさが必要です。このようにして、初期の段階で問題発生を防ぐことができます。
- 脱臭剤や芳香のにおいのするトイレ、また強烈な消毒剤は猫に不快感を与えがちです。
- トイレの配置も重要です。食べ物や水のある場合から離れており、猫が邪魔をされない場所でなければなりません。
- 複数の猫がいる家庭用に販売されているトイレは適していないこともあります。

自立心が旺盛で感情的、意識が高い

猫は仲間を必要としません。独りで狩りに出かけ、休む場所を見つけ、自身の縄張りを守ることができます。きれいに毛づくろいをし、爪を磨き、周りの環境に敏感になり、 敏

捷性とスピードを使ってトラブルから身を守ります。安全な場所に逃げることは危険に直面した際の選択肢です。

他の猫と共存する環境においても猫は犬のように群れを作らず、グループ内の優先順位もありません。猫が同じ種の仲間を必要とするであろうという考えは、社交性に関する人の認識に基づいたものです。猫はグループの中で生きることもできますが、それはファーム内のコロニーのような環境のみです。生まれた時から一緒に育つ子猫の母親のグループができたり、多数の猫が一緒に住むための食糧や住処がある場合にはグループで暮らします。

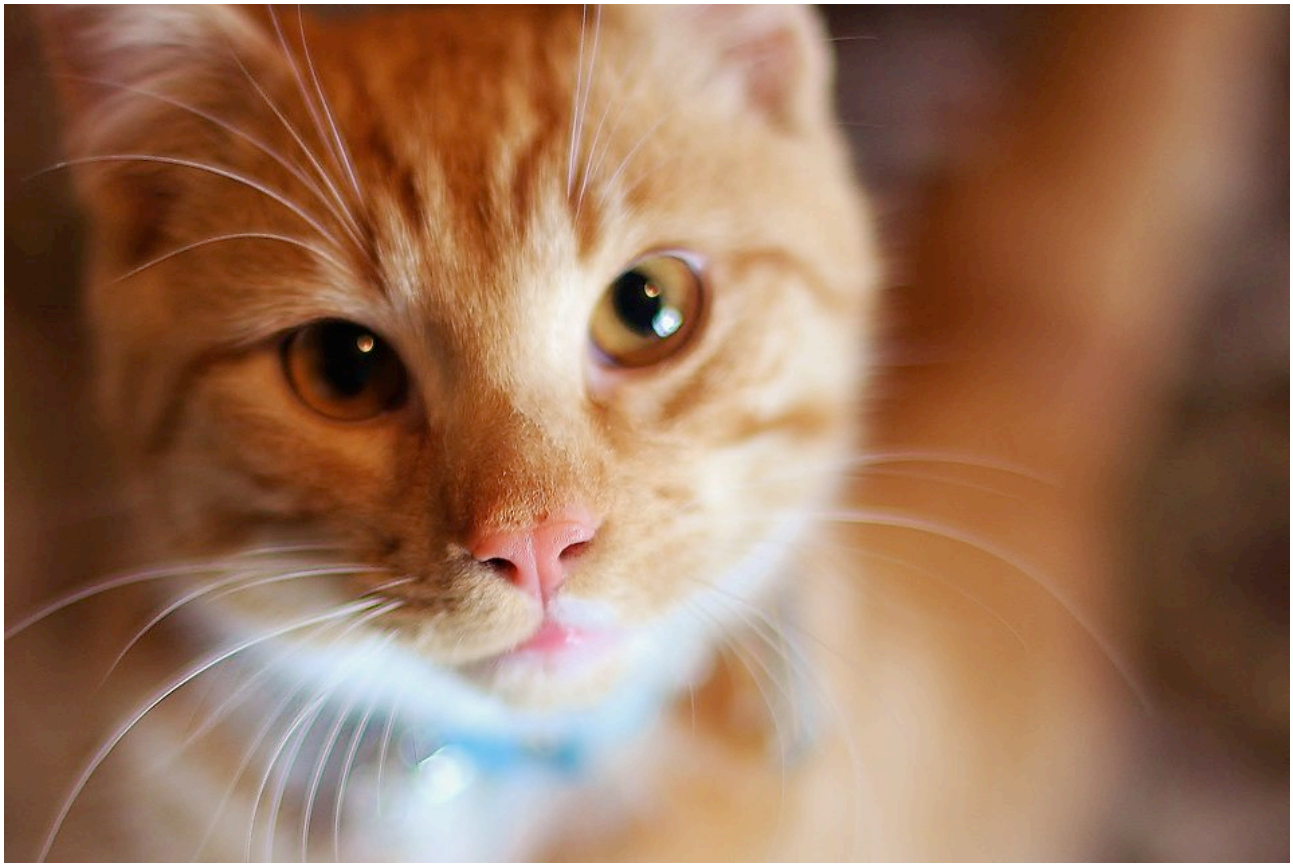
人は猫には表情で何かを表現したり微妙な表情を見せる能力がなく、感情的な動物ではないと思いがちです。しかし猫は生き延びていくために他の動物と同等にさまざまな感情や感覚を持っており、周りの環境に慣れてるにつれて恐れや喜び、フラストレーションなどの感情が芽生え、食べ物にすばやく飛びついたり、危険を避けたりします。猫は自身の機転を維持し、他の誰にも頼らずに生きていくことで独立性を維持します。

猫は病気や痛みの兆候をうまく隠します。周りの注目を浴びないようにじっとして静かに過ごすので、オーナーは猫が苦しんでいることに気づかないこともあります。

猫は、オーナーや他の人たちと交わるタイミングを自分で選ぶことに大きな喜びを感じます。猫の方から近づかせることによって、猫はその人を肯定的に見るようになります。また周りから隠れるために高い所に登ることができれば、猫はより安らかな気持ちになり、安心します。

これは動物クリニックにとってどのような意味を持つのでしょうか?

- 猫は邪魔をされたりびっくりさせられると素早く反応し、クリニックのような逃げられない環境では防御的な攻撃をすることがあります。
- ゆっくりと静かにし、視線を合わせずにアプローチすれば（瞬きはゆっくりと）、猫が感じる脅威を最小限に抑えます。
- クリニックという環境ですでにストレスを感じている猫にとって、大きくて甲高い騒音は不安を感じさせます。
- 首の後ろをつかんだり体に障り過ぎることは、猫に恐怖や不安を感じさせます。
- クリニックで一度でも嫌な体験をすれば次の来院に影響します。
- 怯えた猫は逃げようとします。窓やドアはきちんと閉めておいてください。
- 猫は痛みや弱みを上手に隠します。オーナーは猫の行動の変化には気づいても、その原因がわからない場合もあります。
- 発情期には微妙な合図を出すこともあります。



オーナーの誤解を解くためのアドバイス:

- 猫は人に頼ったり、人との触れ合いを避けることがあります。
- 猫は一般的に、猫の仲間を求めません。一人で生きていくことに満足します。
- 他の猫と縄張りを共有することにストレスを感じます。
- 猫は抱きしめられることを好まないこともあります。
- 日常の生活で視界に入るものや音、においは猫にストレスを感じさせます。
- 他の哺乳動物と同様に、猫は物事を素早く習得します。人に忠実であることは知能の高さを示すものではありません!
- 感情や行動が素早く変化することがあり、邪魔されたりびっくりさせられると素早く反応します。
- 生活の中で習慣となっていること、また何が起きるかを予測できることは、猫のストレスを軽減し、生活のクオリティを向上します。
- 習慣的行動の変化（睡眠時間が長くなったり他との接触を避けるなど）は感情の変化が原因であったり、健康面で問題があることを示す場合もあります。
- 猫にとってきれいに毛づくろいすることはとても重要です。それができない環境は猫にストレスを感じさせます。

- 猫は病気や痛みの兆候を上手に隠します。周りの注目を浴びないようにじっとして静かに過ごすことが多く、オーナーは猫が苦しんでいることに気づかないこともあります。

幼少期の経験が与える大きな影響

猫の中には他の猫との同居を受け入れない猫もいますが、幼少期に人との触れ合いがあった場合はほとんどが人との触れ合いを楽しみます。しかしそれは幼少期に人と過ごすことを学んだ猫に限られます。生後2か月までの経験が、成長後の行動や態度に大きく影響します。居間ですやすやと眠る猫も外で独立して生きる猫も、人と触れ合う機会の多さの違いという点を除けば、多くの点で全く変わりません。

子猫は生後数週間で社会的なアイデンティティと自分で食べ物を見つける方法を学びます。母親猫が離乳した後は、まず死んだ獲物、次に生きている獲物を食べるようになり、その過程で母親猫は子猫に獲物を殺したり狩りをする方法を少しづつ教えていきます。家庭で飼われている子猫も狩りの方法を学びます。これが争いや追跡、攻撃の原点となり、すべての子猫は長時間をかけて習得していきます。おもちゃやゲームを使って子猫と遊ぶことによって、私たちは母親が自分の子供に教えるのと同じように子猫の成長に携わっているのです。

生後2か月ぐらいまでは、周りの環境を学んだり社会的絆を確立することに非常に敏感です。この「敏感な時期」に子猫を適切な態度と頻度でハンドリングすることが、その後適切に社会化期を過ごすために明確な利点を持っていることがリサーチで示されています。生後2か月から7ヶ月の間に少なくとも4人以上からハンドリングを受けた子猫は、それを受けなかった子猫に比べ、より打ち解けた態度で人と接します。男性や女性、高齢者や若者など、いろいろな人と短時間の触れ合いを頻繁に持つことが理想的です。

子猫は人に慣れるということだけではなく、家の中での生活がどういうものであるかを理解しなければならないのです。騒音、子供たち、犬、掃除機、様々な場所、車での移動。子猫はそれらに対して恐怖を感じる必要がないことを学んでいきます。

猫が成人期に近づくと、猫の持つ遺伝子や幼少期での経験、どのような扱いを受けたかによって、成猫としての性格や特性が形成されてきます。猫の発情期は通常生後6ヶ月から9ヶ月ですが、 猫の生まれた季節によってその時期は異なります。この時期から成猫になるまで、つまり生後18ヶ月から4歳までの約2年間に、猫の性格が変わり始め縄張り意識が芽生えます。子猫によっては、社交性のある冒険的な性格から、独りを好んで独立心を持ち始め、用心深くなることもあります。

猫はこの期間に、縄張りの価値を見いだし、独りで生きていくために必要な能力を身に付けます。野生のオス猫はこの時期に自分が育ったファミリーグループから段々離れていきます。若い猫が家から離れ、他の猫と対立する外の世界に入っていくこの時期は、オーナーにとっても心配が募ります。猫が放浪するこの時期には、去勢や避妊の手術を考慮することも必要です。

これは動物クリニックにとってどのような意味を持つのでしょうか?

- 野生の猫はハンドリングが難しいため、飼い猫とは異なった系統的で注意深いアプローチが必要です。
- 小さい時に人と適切に触れ合っていない猫は、人との関わりや人がいる環境に大きなストレスを感じます。恐怖を感じている猫には慎重に対応し、入院する場合はケージの中に猫が隠れることのできるブランケットなどを入れます。
- 社会性を高めるために最も重要な時期は生後8週間までです。動物クリニックは、ブリーダーや猫のオーナー、保護施設の職員などに対して、 若い猫に適切な環境を提供し猫の自信を高めるようアドバイスしていきます。

オーナーの誤解を解くためのアドバイス:

- 猫は独自のパーソナリティを持っており、すべての猫がフレンドリーで人との触れ合いを楽しむとは限りません。

- 幼い時期に人と適切に触れ合う機会がなく神経質になっている子猫や成猫に対する手法は限られており、野生の猫がペットになる可能性はかなり低いと思われます。

家庭内の、またクリニックに来院した際の猫の行動やオーナーへの態度について簡単に説明してきました。これまでの情報をすべて心にとめ、クリニックに来る猫に最もストレスを与えないキャットフレンドリーなケアを構築していきましょう。

3. ISFM キャットフレンドリークリニック

真にキャットフレンドリーなクリニックを実現するには、少なくとも3つの要素が求められます:

- まず初めに、そして非常に重要なことは、猫やオーナーに対するクリニックのヘルスケアチーム全体の振る舞いやアプローチです。これをattitude（振る舞い）と言う言葉をもじってCattitude（猫に対する振る舞い）と呼びましょう！ それに加え、クリニックがオーナーと積極的にコミュニケーションを取ることが大切です。
- 2番目に重要なことは、クリニックの臨床スタッフが継続して専門能力を高め、猫医療や外科処置、そして猫のケアに関する最新知識を身に付けていくことです。それに加え、臨床結果を監視し症状の改善を確認するシステムが確立されていなければなりません。
- 3番目に重要なことは、猫の患者に最高のケアを提供するために、クリニックが適切にデザインまたはレイアウトがされており、適切な設備や装置、器具が揃っていることです。

以上の3つの要素はすべて重要です。これらを満たすことによって「キャットフレンドリー」で「キャットケアリング」なクリニックが実現できるのです。

貴クリニックはキャットフレンドリーな手法をすでに取り入れているかもしれません。しかしほんの小さな要素が大きな改善につながることもあります。本項では貴クリニックの

さまざまな要素に目を向け、水準の高いキャットフレンドリーなクリニックの実現を目指します。

興味を失わずにクリエイティブになりましょう！ キャットフレンドリークリニックの条件には困難に思えるものもあるかもしれません。小規模のクリニックの場合は特にそう感じられるでしょう。ご心配なさらないでください。クリニックのスペースと設備をクリエイティブに使えば、たいていのことは可能なのです。

「*cattitude*」の展開 – 猫の患者に適したアプローチ

猫に適切に対応するためには、数々の要素が求められます。猫の気持ちを理解し、穏やかでリラックスした方法で猫をハンドリングできる方もいます。それとは逆に、楽にまた自然にハンドリングできない方もいますが、その方法を学んでいくことは可能です。大切なことはまず猫のことをしっかりと理解することです（第2項–「猫とはなんでしょうか? 」をご覧ください）。猫を真に理解し、おだやかにアプローチする方法を学び、猫のハンドリングや拘束時は「接触が少ない方が効果的」であることを認識し、オーナーに対して、またオーナーが直面する課題や困難に対して心遣いを持って接することが大きな助けとなります。オーナーにとっては猫をクリニックに連れてくることさえ困難な時もあるのです。

猫やオーナーに前向きな態度で接するクリニックを実現するために、スタッフには以下が求められます:

- 猫を歓迎する
- 猫に前向きな態度で接し、クリニックの中や外での猫のニーズを理解している
- 猫のオーナーを理解し、猫をクリニックに連れてくることの困難さを理解している
- 猫への接し方、また猫の近くにいる時の振舞い方を心得ている
- クリニック内での猫の行動を理解し、記録し、それに合ったアプローチを取る
- 猫のハンドリングを理解している猫のストレスを和らげる方法で対応することが最も重要であり、どうしても必要な時以外は猫をきつく拘束しない
- 猫やオーナーのケアには必ず「キャットフレンドリー」な原則を取り入れる
- 猫の病気を予防する最高のヘルスケアを与えてあげるよう、オーナーに勧める

猫やオーナーにとって、医療関係者から猫に興味がないような印象や猫を理解していないという印象を与えられることほど不快なことはありません。スタッフにそのつもりがなくても、そのような印象を与えることがあるのです。それとは逆に、キャットフレンドリーな雰囲気があふれるクリニックはオーナーに大変好意的な印象を与えます。

クリニックへ来る猫への理解を示すアプローチと、「最善を尽くす」という態度をベースとして、クリニックの構成やハンドリング、手順を整えて行けば（小さな変更がほとんどです）、キャットフレンドリーなクリニックという強力なメッセージを伝えることができます。

これは医療チーム全体にとって大変重要です。獣医師による猫へのアプローチの仕方は極めて重要ですが、オーナーは診察室に入る前に待合室でしばらく待つこともあり、最初に接するのは通常看護師や受付スタッフです。スタッフ全員の前向きな態度やアプローチが、猫とオーナーを安心させ、ストレスを和らげます。スタッフ全員がキャットフレンドリーな精神を持つことが不可欠なのです。

猫の様々な品種や性格に詳しく、それを識別でき、各品種の基本的な性格を把握することによって、猫についての理解度をオーナーに示すことができます。オーナーが複数の猫を連れてきた場合、特に猫同士の絆が深い場合には（アジアからきたより社交的な品種で家族関係にある猫など）、一緒に診察を受けさせるように希望することもあります。クリニックを出た後にお互いのにおいに違和感を持たず、同じにおいがすることで猫同士のその後の衝突が防げるからです。

猫のオーナーのニーズを理解できるスタッフ

猫について、また患者としての猫独自のニーズを理解すると同時に、猫のオーナーを理解することも大変重要です。多くのオーナーにとって、猫をクリニックに連れて来ること自体が大きなストレスにつながります。まず猫をつかまえてキャリアに入れます。 猫が慣れた環境や縄張りから猫を連れ出し、ほとんどの場合は車や公共機関を使ってクリニックに連れて来るのです。多くの猫にとってこれらの行動は大変ストレスがたまるもので、結果的にオーナーに苦痛を感じさせ、オーナーを疲れさせてしまいます。ここでは、猫をクリニックに連れてくることがオーナーにとって大変な作業であることを理解し、マイナスの影響を軽減するために何が必要であるかを理解することが大変重要です。

最初の印象

猫がクリニックに来るずっと前から、オーナーのクリニックに対する印象は決まります。オーナーがクリニックに予約の電話をした際に対応したスタッフが、クリニックの第一印象となるのです。予約を受けた際に、様々な方法でオーナーを安心させ、診察のストレスを軽減するサポートができます。クリニックに連れてくる際に猫をリラックスさせる方法をアドバイスします。これはオーナーと猫の両方にとって大変有益です。猫は以下のような原因でストレスを感じます:

- 不慣れなキャリア
- 日頃体験しない車での移動
- 移動中やクリニック内の不慣れなにおいや風景、騒音
- 初対面の人や他の動物。身の危険を感じさせます。
- 不慣れな環境で知らない人たちにハンドリングされ、診察される
- 治療や入院

以上はどんな猫にとっても大変ストレスのたまることです。スタッフはまず、猫をクリニックに連れてくる方法や移動に適したキャリア、また移動中の安全の保ち方をオーナーにアドバイスします。

- キャリアは、頑丈で、猫が逃げられず、オーナーや臨床スタッフが猫を出し入れしやすいように設計されていなければなりません:
  - プラスチックでコーティングされたワイヤーバスケットでトップが開くタイプのものは猫が隠れる場所がないため、キャリアに毛布などをかぶせます。
  - プラスチック製でトップが半分取り外せるタイプは、キャリアから出たがらない猫の診察に適しています。

- 複数の猫を連れてくる場合は、防御的なストレスを避けるために別々のキャリアに入れます（仲の良い猫同士の場合はキャリアを同じ場所に置くことは問題ありません）。
- キャリアを家の中の縄張り内に常に置いておき、猫が慣れていれば、キャリアに入れられてもストレスのたまる移動を猫に連想させません。家の中で猫が寝たり休んだりする場所に キャリアをずっと置いておくことが理想的です。それができない場合は、来院する数日前から猫をキャリアに慣れさせます。中で食事をさせたりすると、猫がキャリアに慣れてきます。

- キャリアには猫が安心するにおいも必要です。猫が一番好きな人のにおいがする衣類や、猫が普段使っているブランケットなどを入れるよう、オーナーにアドバイスしてください。フェイシャルフェロモンがあれば、猫をキャリアに入れる30分ぐらい前にブランケットにスプレーするか、またはキャリア自体にスプレーします。
- 猫には隠れる場所が必要です。移動中はキャリアにカバーをかけて猫のストレスを軽減し、クリニックの待合室や院内の移動の際にもカバーを使用します。出口以外からは周りが見えないキャリアよりも、楽に開閉ができるキャリアにカバーをかけることをお勧めします。
- キャリアは車のバックシートの足元に置くか、シートの上に置く場合は動かないようにシートベルトでしっかりと固定し、キャリアが水平で傾いていないことも確認します。
- スムースな運転を心掛け、騒音や音楽は避け、穏やかに語り掛けて猫を安心させます。
- キャリアの中での排尿 / 排便に備え、スペアのブランケットを常備します。
- キャリアは慎重にまた安全に取り扱い、手で持つ時は底を支え、 移動中には足をぶつけないように気を付けます。

クリニックに到着した際には、猫とオーナーを歓迎し、安心させてあげることが大切です。フレンドリーに応対し、待合室や診察について明確に説明します。オーナーによって

は、猫と一緒に車の中で待ったり、 猫を車に置いたままクリニックに来て犬がいるかどうかを確認する方もいます。

ここではオーナーと猫の希望に合わせた柔軟な応対を心がけます。

猫の専任従事者

猫について他のスタッフを教育したりアドバイスできる猫の専任従事者を置くことは、クリニックとオーナーにとって大きなメリットです。大切なことは、猫を理解し適切なテクニックを学び、自信を持つことです。専任従事者のいるクリニックでは、そのスタッフが中心となって猫についての情報を提供し合ったり、話し合いを持ったり、また「猫の立場で考える」手法を採用していきます。専任従事者は獣医師である必要はありません。看護師や助手の方々がこの役割に適しています。

猫との接し方や猫の周囲での振舞い方を心得ているスタッフ

猫のケアに直接携わるかどうかに関わらず、医療チーム全員が猫の周囲での振る舞い方を理解することが重要です。例えば:

- 猫はにおいに敏感です。クリニックのにおいに加え、きつい香水や消臭スプレーの使い過ぎは猫に警戒心を与えます。部屋を換気したり、消毒剤はできるだけにおいのきつくないものを使用し、メーカーの指示に従ってきれいに洗い流します。
- 猫は音に敏感です。人間や犬に比べて聴力が優れていますので考慮してください。
- 猫はいつもの縄張りから離れたところにいます。縄張りの外でもうまく対応できる猫もいますが、猫のほとんどは大きなストレスを感じます。猫がストレスをためていることを理解し、 適切に対応することが大切です（猫を他の動物から離し、猫を思いやって穏やかに対応するなど）。

- 待合室や診察室にフェイシャルフェロモンのスプレーをまくと猫のストレスを和らげますが、クリニックに適切な設備を備え、親身な態度で接することが猫のストレスを軽減する最高のアプローチです。

猫のハンドリングを熟知したスタッフ

猫を適切にハンドリングすることは大変重要です。猫は通常知らない人や慣れていない環境に大変敏感で、その際のボディランゲージが誤解を招くこともあります。猫が恐怖を感じている場合でもそれが攻撃的な態度と見られ、ストレスや痛みを示すサインを見落としてしまいがちです。

シンプルなテクニックであっても猫を適切にハンドリングすることは大変重要ですが、通常は十分に考慮されていません。これはキャットフレンドリークリニックを実現するための大変重要な要素です。クリニックのスタッフ全員がキャットフレンドリーなハンドリングを身に付けてください。猫のハンドリングを得意とし、他の人よりも上手に猫を扱える方もいます。その才能も大切ですが、ここではスタッフ全員が猫のハンドリング方法を学び、スキルを身に付けることが重要です。

猫のハンドリングには「接触が少ない方が効果的」というアプローチが必要です。拘束されることが少ない方が猫はうまく対応します。多くの猫は不安を感じています。強く拘束するのではなく、猫が防御的にならないように少しずつ安心感を与えてあげてください。猫の首の後ろをつかむことは最後の手段です。 首の後ろをつかんで持ち上げることは絶対にしないでください。猫をつかまえてすぐに首の後ろをつかんだり、強く拘束することは猫をおびえさせ、猫は防御的な態度を取ります。

- 猫には常に穏やかに近づきます。最初は猫と目を合わせないでください。長い間目を合わせることは猫に身の危険を感じさせます。猫を見たら目をそらし、ゆっくりと瞬きをします。猫に触れる前に、まずあなたの手のにおいをかがせて猫の反応を確認します。猫が嫌がらない場合は、ケージやキャリアから出す前になでたり話しかけることも効果的です。フェロモンが分泌するあたり（鼻筋の上や耳介前部）をこすると、猫が手に頭をこすりつけてくることがよくあります。オーナーは感激するでしょう!
- 必要な場合には猫を拘束する厚めのタオルを準備します。
- すべりやすいサーフェス上を移動させられると猫のストレスが増加しますので、猫が足でつかまることができるよう、タオルやゴムマットなどを下に敷くといいでしょう。診察台の上に心地よいベッドなどをつくると、猫が座ったり横になったりできます。
- 合成品は静電気を起こしますので、コットン製品の使用をお勧めします。

入院中の猫のハンドリング

猫の多くは人との触れ合いにうまく反応します。スタッフが猫と遊んだり、優しくなでたり（頭の周りは避ける）、毛づくろいをしてあげると猫のストレスを和らげます。猫によってはこれを嫌う場合もありますので、猫の性格を見極めることが大切です。人との関わりを望まない猫もいますので、その場合はかまわないようにします。

- 猫にはおだやかに静かに対応しますが、遊んで欲しがらない時はそれを認識し、放っておくことも大切です。
- 入院中の猫に関わるスタッフの数を制限してください。猫は聴覚と臭覚にすぐれていることを心にとめ、猫の視点から周りの環境を整えます。

- 一貫性のある環境を与え、猫が次に何が起こるかを予測でき、自分が状況をコントロールできると感じられることは、猫の幸福にとって極めて重要です。
- 病棟内に静かな音楽を流すことも猫を落ち着かせる効果があります。
- 採血や血圧測定などの簡単な処置、また麻酔をかける際は、必ず静かな場所で行います。処置を始める前にまず猫を部屋に慣れさせますが、他の猫の前ではこれらの処置は行わないでください。
- 猫をじっと見たり、押しつけがましく乱暴に猫を扱うことは猫にストレスを与え、有害な状況をもたらすことをスタッフ全員に伝えます。

- オーナーがお見舞いに来た場合、可能であれば他の猫の邪魔にならならないように別の部屋を提供し、オーナーと猫に一緒の時間を過ごしてもらいます。
- 猫同士の行動を慎重に観察し、問題が起こりそうな場合は迅速に対応します。
- 治療以外の目的で猫を預かる場合は（オーナーの旅行など）、感染力の強い病気が移らないように衛生面に注意し、入院中の猫とは別の預かり専用の施設を利用します。
- 治療に障害がない場合はおやつをあげてみます。喜んで食べれば猫はクリニックに対して良い印象を持ちます。

AAFP/ISFMが発行するキャットフレンドリーハンドリングのガイドラインは、猫のハンドリングに関するすぐれたリソースを提供しています。これらのガイドラインに従ってください。またJFMSのウェブサイトにも掲載されています（https://journals.sagepub.com/page/jfm/collections/guidelines/index）

クリニックとオーナー間のコミュニケーション

猫に包括的なケアを提供するには、クリニックとオーナーの間で効果的にコミュニケーションを取ることが大変重要です。ここでも親身的で理解を示すコミュニケーションを取るよう心掛け、オーナーと話し合いを持ったり、心配事があれば相談できる環境をつくります。ここで言うコミュニケーションとは診察や治療の場のコミュニケーションだけでなく、その他の様々な場面でのコミュニケーションも意味しています。オーナーが診察を予約する際には、クリニックでの処置やクリニックに到着した際の手順を説明し、必要な場合は猫をクリニックに連れてくる際の移動方法についてアドバイスします。オーナーからの質問があるかを尋ねれば、オーナーがクリニックからの説明をどの程度理解したかを把握する目安となります。

オーナーとのコミュニケーションにおける重要点、また改善可能な点には以下が含まれます:

- クリニックに来るすべてのオーナーとは、直接、またインターネットなどを利用してコミュニケーションを取ります。郵便、メール、テキストメッセージ、ソーシャルメディア、電話などの方法がありますが、クリニックやオーナーによってその方法は様々です。定期的な予防治療の時期がくれば（予防接種やのみ取り治療などのリマインダーなど）、何らかの方法を使ってオーナーとコミュニケーションを取ります。クリニック発行のニュースレターやソーシャルメディアへの投稿などで、オーナーと積極的にコミュニケーションを取ることをお勧めします。医学や獣医学の知識はオー

ナーによってかなり異なりますので、 分かりやすい言葉を使い、専門用語は意味を説明します。

- ケアを担当するスタッフをオーナーに紹介します。オーナーが見やすいように、スタッフ全員とその職務（看護師、病棟担当者、受付、獣医師など）、写真を掲載した最新リストを待合室（またはクリニックのウェブサイト）に掲示することをお勧めします。猫の専任従事者がいる場合はオーナーに紹介します。
- 診察や治療についてオーナーと話し合う際は、治療のオプションについてオープンに話し合うことが重要です。オーナーには大体の治療費を伝え、必要な場合は（またはオーナーが求める場合は）書面で提供します。診察や治療の費用が当初予測した額を

超える場合はできるだけ早くオーナーに知らせ、必要な場合は別のオプションについて話し合います。オーナーが希望する場合は、すでに行った治療について項目別の費用を記載した請求書を提供します。

- クリニック内に一名、または複数の猫の専任従事者を置くことはクリニックに大きな価値をもたらします。専任従事者は獣医師である必要はありません。 看護師の方が適していると思われますが、猫やオーナーに思いやりを持ち、猫の行動やハンドリング、アプローチの仕方を理解している方が適しています。オーナーがわかりやすいように専任従事者であることを明確に表示し、猫について心配事がある場合は専任従事

者に相談するようオーナーに伝えます。専任従事者はまた、クリニックが「キャットフレンドリーの基準」を満たしているかどうかの評価もできます。

- オーナーにはフィードバック（肯定的また否定的なものも含め）の提供をお願いしますが、それに加え、オーナーが希望する場合は正式に苦情を申し立てることができることや苦情に対するクリニックの対処法を明記した文書を準備し、求められた場合はオーナーに提示します。
- 診察中に口頭で伝えた情報を補うために、パンフレットなどを準備することを強くお勧めします。人は説明されたことの大部分は忘れてしまいがちです。またよくある問題への対応法を記載したパンフレットを受付や待合室に常備し、オーナーへの情報提供に使用します。CFC発行のオーナー用パンフレットには、猫への投薬方法（タブレット、目薬、正確な治療など）、 クリニックへの行き帰りの際の猫の移動法についてアドバイスが提供されています。適切で信頼のおけるウェブサイト（インナーナショナルキャットケアのウェブサイトなど。www.icatcare.org）の紹介もオーナーから感謝されます。

時間外のケアへの対応

すべてのクリニックが入院中の猫に24時間のケアを提供したり、24時間の緊急診察に対応できるわけではありません。オーナーは猫がどのような治療を受けたか、加えて緊急時の対応方法を理解しておくことが重要です。そのために:

- クリニックには、通常の受付時間外での応急処置についてのポリシーが必要です。オーナーは、応急処置が必要な場合にどうすればいいかを理解していなければなりません。電話の応答メッセージにその情報を残したり、スタッフが時間外の電話に対応し、オーナーには必ず何らかの方法で緊急時の対処法を知らせます。
- 夜間または週末 / 祭日などクリニックの時間外に猫が入院する場合、猫のケアをするスタッフについて、 またケアの頻度をオーナーに説明します。入院している猫を時間外に継続的に監視することは現実的に難しいかもしれませんが、ケアと監視のレベルについては必ずオーナーに伝え、入院中のケアやその他のサービスについて明記したパンフレットを作成することが理想的です。

貴クリニックの「キャットフレンドリー」の程度

猫へのアプローチの方法を変えることはクリニックを大きく改善します。すぐにその違いに気づかれることがあるかもしれません。しかしながらクリニックをオーナーの視点からも見ること、そしてオーナーの懸念や見識にも対応しながら必要な点を変えていくことが大変重要です。オーナーにフィードバックや情報の提供を依頼することは大切です。以下の2つの方法があります:

- まず初めに、クリニック内のすべての面においてフィードバックをする機会をオーナーに提供してください（肯定的なものと否定的なもの）。オーナーにはフィードバックを奨励していくつかの方法を提供し（クリニック内にカードをおいて記入してもらう、ウェブサイトのコメント欄に投稿してもらうなど）、無記名、また記名にするかはオーナーに選んでもらいます。
- 次に「ミステリーショッパー」を利用してフィードバックを求めます。これは第三者が一般消費者を装って店舗の接客態度や環境を評価する調査方法です。まず、第三機関を使ったり、猫を飼っている人に匿名で予約を取ってもらいます。この場合はクリニックのスタッフ全員が知らない人でなければなりません。その後クリニックのサービス、どの程度キャットフレンドリーであるか、また猫に対する理解度についてフィードバックを提供してもらいます。他の方法では得ることのできない、オーナーの視点から見た価値ある情報を提供してくれます。

スタッフの臨床スキル研修、開発

継続的な専門教育

すぐれた臨床業務とは、最新の知識を取り入れるだけではなく、それをクリニック内で適切に採用することが重要です。医療手順や治療体制は、現行の「優良事例」に従って修正しなければなりません。

クリニックが現行のすぐれた臨床基準を満たすためには、臨床スタッフ（獣医師、看護師、助手）が継続的な専門教育（CPD）を受けることが大切です。以下のような方法で実施します:

- コンファレンスやセミナーへの参加
- ウェビナー

- 通信教育コース
- ジャーナル / 記事 / 学術論文などを読む

以下をお勧めします:

- 獣医師は年間35時間以上のCPDを受ける。このうち10時間までは個人学習（ジャーナル、本などを読む）で補うことができます。
- 看護師 / 助手は年間15時間以上のCPDを受ける。このうち5時間は個人学習（ジャーナル、本などを読む）で補うことができます。
- 獣医師および看護師が受けるCPDの大部分は猫に関する内容であるべきですが、実際の割合は自身の臨床時間のうち猫に使う割合と合わせる必要があります。スタッフ全員が、受講したCPDについて文書に記録します。

クリニックのライブラリと参照文献

獣医師と看護師のために、各種参照文献の最新版をクリニックに常備します。以下を含みますが、これに限定されません:

- 小動物や猫専門の参考書（最新版）
- 小動物や猫専門のジャーナル（最新版）

ISFMは、獣医師の臨床業務に役立つよう考案された資料を多数作成しています（JFMSを含む）。プラクティスメンバーシップには、JFMSへのアクセス、およびクリニック内の獣医師5名までに月一回のウェブナリーへのアクセスが含まれており、看護師用の無料ISFMメンバーシップには看護用ジャーナル（Feline Focus）へのアクセスが含まれています。

すぐれた臨床業務

すぐれた臨床業務とは、最新の知識を取り入れるだけではなく、それをクリニック内で適切に採用することが重要です。クリニックでの処置や治療体制は、現行の「優良事例」に沿って修正しなければなりません。

臨床転帰を評価するために何らかの方法で業務を継続的に監視し、改善が必要な領域を識別することが重要です。すぐれた臨床業務のために日常的な臨床監査の実施などをお勧めします。

獣医師や看護師が臨床業務を見直して臨床転帰について話し合い、改善が必要な領域を識別する機会を定期的に持つことが必要です。定期的に臨床ミーティングを開き、予期せぬ合併症や突然死などのケースによる疾病率や死亡率を見直し、今後の問題を防ぐためのポリシー変更の必要性などについて話し合うことも一つの方法です。

クリニックのスタッフ数が少ない場合は、臨床プロトコールや手順、様々なケースについて外部の同業者と話し合う機会を持つことも大切です。すべてのクリニックには、ISFMメンバーディスカッションフォーラムなどを利用して他の人の経験から学ぶことをお勧めていします。

キャットフレンドリーなクリニックの実現に向けて

あらゆる動物クリニックにおいて、ロケーションやアクセスの良さ、さらに建物自体が一般基準を満たしているかどうかは重要です。一般原則としてクリニックはオーナーが行きやすい場所にあることが大切ですが、猫のためにも騒音がひどい場所は避けなければなりません。クリニックには手入れが行き届いていることに加え、以下が求められます:

- 室内の環境が整っており、臨床面から見て十分に清潔である
- 悪臭がなく、適切に換気されている
- クリニック全体に十分な照明がある
- 猫が逃げないように適切な対策を取っている

待合室－クリニックへの玄関口

待合室とそこで働くスタッフは、猫とオーナーに対する第一印象と、クリニックを出る前に最後の印象を与える重要な役割を持っています。適切に設計された待合室とキャットフレンドリーなスタッフが猫のストレスを軽減し、 オーナーに有意義な経験をもたらします。 真にキャットフレンドリーな待合室にするためには、クリニックにとって実用的で可能な方法であることはもちろん、猫のニーズを考慮し、そのニーズをどのように満たしていくかを慎重にプランしなければなりません。

待合室には通常の患者数に対応できる十分な広さと座る場所が必要ですが、清潔で、騒音や悪臭がないことも重要です。全体的な目標は以下を実現することです:

- 猫が身の危険を感じない安らかな環境で、診察前に不安を感じさせない
- スタッフが猫やオーナーのことを大切に思ってくれていると感じさせる雰囲気

猫がクリニックに来るとまず初めに、新しい環境が安全であることを確認しようとします。待合室は、猫が感じる脅威（見えるもの、聞こえるもの、におうものなど）を最小限に抑えるように設計し、使用します。猫専用のクリニックではない場合の理想的な形とは、犬と猫が別々に来院できる体制です。それができない場合でも猫のための慎重なプランが必要です。簡単な方法でも役立ちます:

- スペースがある場合は、猫専用の待合室を設けます。
- 猫専用の待合室を設けられない場合は、待合室に仕切りを設置して犬と猫のスペースを分けます。犬と猫が目を合わせないように壁や仕切りを設置し、犬が待合室で吠えたり大きな音を出したりしないよう配慮します（よく吠える犬はクリニックの外で待たせるなど）。
- 犬と猫のスペースを分ける際は、スペースのロケーションや広さ、また猫がそのスペースに出入りする経路も考慮し、猫が待合室にいる間はなるべく人や他の動物との接触を避けます。猫専用のスペースを設けても、 診察室に入るために騒音のひどい場所や犬のそばを通らなければならない場合はあまり効果がありません。待合室から診察室に入る猫専用の経路があれば、犬を避けることができます。

- 待合室に仕切りを設置できない場合は、猫および犬専用の診察時間を設ければ、犬と猫が同時に待合室を使うことがありません。猫が待合室にいる時に犬が退院する場合、また犬が待合室に入る必要がある場合は、猫と犬が接触しないように配慮します。

猫専用の待合所に関しては以下も考慮してください:

- 受付のスペースが狭いと、オーナーが受付をする際に猫と犬が接触する可能性があります。受付はなるべく広い場所においてください。接触のリスクを軽減するために、幅広いデスクと十分なスペースを確保します。
- 猫のキャリアを床に置くと猫は不安を感じます。受付のデスクを低くしたりデスクに幅広い棚が付いていれば、キャリアを犬の頭より高い位置に置くことができます。
- 診察室からの騒音が待合室まで聞こえないようにします。
- 犬を猫のキャリアに近づけないよう記した注意書きを掲示し、犬のオーナーには待合室で猫に配慮するようお願いします。
- 猫とオーナーが長時間待合室で待たないでいいように配慮します。
- クリニックによっては待合室に十分なスペースがあり、猫とオーナーを待たせずに直接診察室へ案内できるところもあります。待合室でストレスを感じやすい猫、また明らかにストレスを感じている猫にはキャリアに毛布をかけ、できるだけ待たせずに診察します。
- 他の猫と目を合わせることも猫の不安を募らせ、ストレスを感じさせます。猫の待合所が狭いと、混んでいる時間は他の猫との接触が増えてしまいます。以下のような方法で対策を取ります:

- シートとシートの間に小さい仕切りを置きます。
- キャリアを覆う清潔なブランケットやタオルを提供することもできますが、オーナーには自宅からブランケットやタオルを持参するようアドバイスします。キャリアにカバーをかける場合でも、犬と猫の間に仕切りを置いてください。
- キャリアを置くための棚やいすなどを準備します。床からの高さが1メートル程度が理想的です。キャリアとキャリアの間には仕切りを設置してください。

待合室の設計やその使用方法に加え、以下の要素がオーナーに安心感を与えます:

- 猫を理解し、猫についての基本的なアドバイスを提供できる受付係や看護婦。一般的なケアや食事、行動、寄生虫の駆除やのみの管理、去勢や避妊、予防治療などが含ま

れますが、猫についての情報を求めるオーナーには、信頼できる問い合わせ先の詳細をオーナーに提供します。

- 猫の専門組織（ISFMなど）のメンバー認定書や猫に関する資格証明書、スタッフが継続的に受けている研修の証明書など
- 様々な品種の猫の紹介やクリニックに来る猫の写真、クリニック内の詳細な写真、プロモーションや講演、猫に関する情報を共有する場の詳細などを掲示します。
- オーナーのために猫についての雑誌や情報誌を常備します。クリニックの行き帰りについてのアイディアや投薬方法など、役立つ情報が含まれています。

診察室

効率よく穏やかに猫を診察するためには、安全で猫に不安を感じさせない診察室が必要です。

診察のみに使用する部屋が最低一部屋は必要ですが、通常の患者数に対応できる数の診察室が必要です。診察室の要件:

- 清潔で衛生的。十分な照明があり、適切に換気されていること
- 獣医師、オーナー、猫、看護師が窮屈に感じない程度の十分なスペースがあること
- プライバシーを保って安全に診察するために（猫が逃げるのを防ぐ）密閉できること。神経質な猫を診察している際に人が入ってくるのをふせぐため、ドアに鍵がかけられることを理想的です。
- 十分な洗浄と消毒ができるような材質の床やテーブルを使用していることステンレス製の診察台は冷たく、音がして、熱や光を反射してすべりやすいので、ゴムマットを敷いてください。あたたかいテーブルトップは猫に快適さを与えます。

それに加えて:

- 外に続く窓がある場合は、猫が逃げ出さないための安全対策を取ります（猫が逃げ出せるスペースまで窓が開かない仕組みになっている、窓の外に安全用ケージを設置するなど）。
- 眼科検査や皮膚科検査のために、真っ暗にできる部屋（照明なし）が必要です。
- 次の患者が来る前に手を洗ったり、サーフェスを消毒するために、手洗いや消毒の設備を設置します。

- 診察台をクリーニングして部屋を換気し、前の患者が残していったにおいを取り除きます。
- 壊れやすいものや害を及ぼす可能性のあるものは戸棚に保管します。
- 猫が容易に入ることができたり、猫を簡単に取り出せないような穴や隙間がないことを確認します。
- 可能な場合はフェロモンスプレーや拡散器を使ってよりリラックスした環境を整えます。ただし猫を上手にハンドリングすることはどんなフェロモンスプレーにも勝るすぐれた手法です。

診察室の設備

診察には以下を含む器具が必要です:

- 猫の診察に適した聴診器（小さな振動版の付いた聴診器など）
- 猫の診察に適した小さいコーン付きの耳鏡。使用後は次の患者に備えて適切にクリーニング、消毒 / 殺菌をします。
- 検眼協
- ペントーチとハンドレンズ
- 音の静かなクリッパー

- 体温計 – ソフトで先が柔軟な、迅速に体温が図れる体温計が理想です。使用後は次の患者に備えてきれいに洗浄 / 消毒し、校正します。
- 非観血的血圧測定器（意識のある猫にはドップラーやHDDが適している）
- レントゲン写真を表示する装置（ビューワー、またはデジタルレントゲン写真用のスクリーン）
- 猫の計量に適し、適切に校正されている正確な電子体重計診察の際は猫の体重を監視し、鎮痛剤や麻酔剤を投与する前には必ず体重を測ります。

臨床記録

すべての患者にとって、効果的で優れた臨床記録は不可欠です。臨床情報はすべて文書または電子フォーマットで保存し、必要な場合に臨床スタッフがすぐに利用できるようにします。

話し合いのプロセス

これまでの病歴についての情報を収集し、猫がなるべくストレスを感じないようにしながら猫の健康をチェックし、今後の治療や検査についてオーナーと話し合います。

常にキャットフレンドリーなハンドリングの原則に従い、猫が不慣れな環境に慣れるための時間を与えます。話し合いには少なくとも10分間は必要ですが、時間を延長できればさらに効果的です。

病歴について

これまでの病歴について、できるだけ詳しい情報を収集し、標準のフォーマットに記録します。問診表を使うとすべての患者に対して標準化されたデータを収集でき、大変有益です。

- 猫をクリニックに連れてくる前、または待合室で待っている間に、猫の病歴や健康に関するアンケート（素行や運動能力、定期的な予防治療、全体的な健康などについて）をオーナーに渡し、できるだけ詳しく記入してもらいます。The **Cat Care *for* Life** のプログラムは、健康や環境、運動能力についてのアンケートをはじめ、数多くのリソースを提供します。

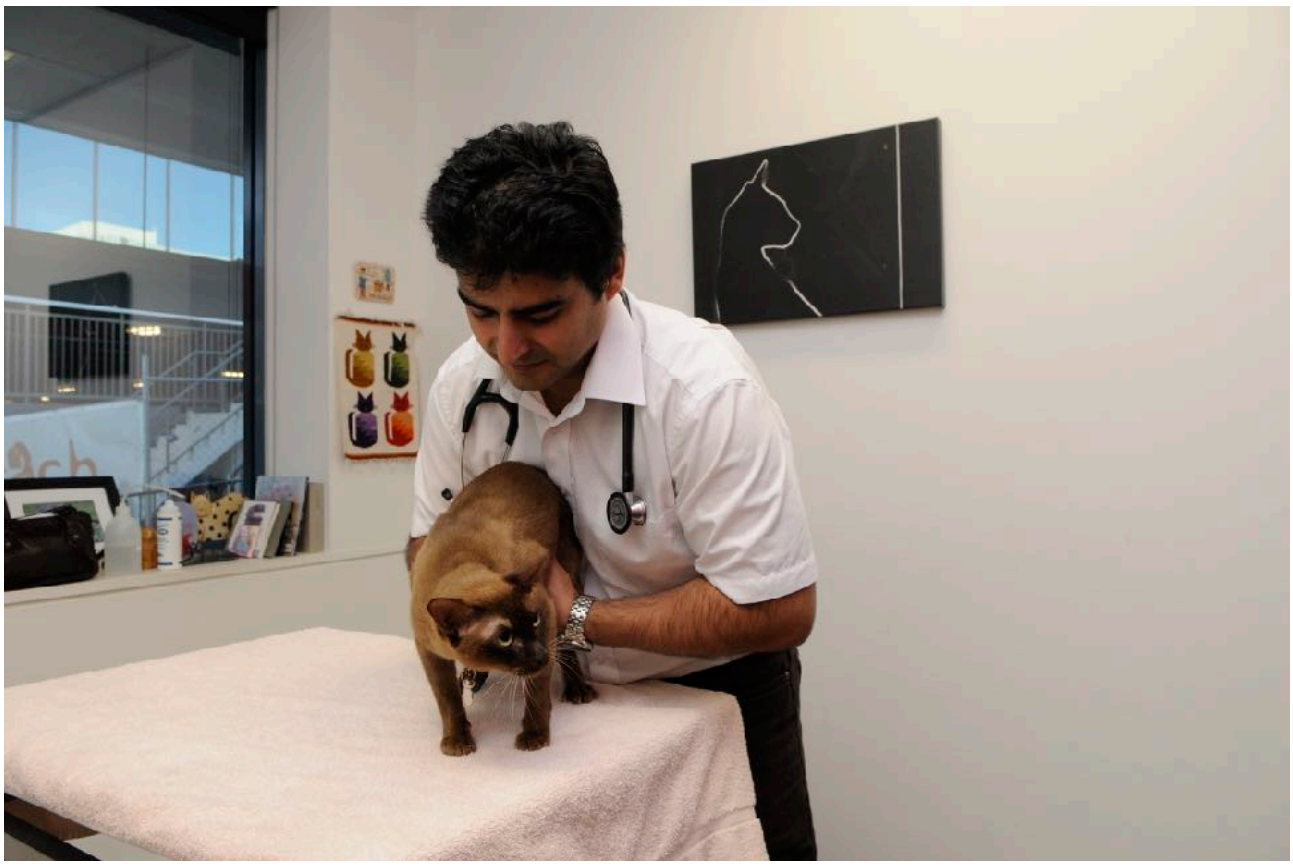
- 病歴に関するアンケートには、猫の食事やライフスタイル、食事の習慣を評価するために、栄養についての質問も含めます。
- 猫の健康状態全般を把握する際は、猫の素行や飼われている環境、環境の変化などを見落とさないでください。潜在的な問題を早期に把握するために必要です。健康面や素行面の問題（肥満、関節炎、突発性膀胱炎、不適当な場所での排泄など）は相互関係があることを覚えておくことも大切です。
- 猫が成熟期に達すると（7歳以上）変形性関節症のリスクが大きく高まります。変形性関節症の兆候は現れにくく、オーナーに自宅で様子を見てもらうとより早期に判断ができるでしょう。このような猫にとっては、運動能力のチェックリストやアンケートは大切です。
- 医療的な問題がある場合でも猫の健康全般についての話し合いの際に質問できますが、緊急の場合は迅速に対処します。

健康診断

診察室では、辛抱強く穏やかに、相手に共感する態度で接することが大変重要です。最高の環境とアプローチで対応してもらっても、猫によっては不安を取り除くことができず、健康診断の開始が困難な場合もあります。その場合は時間を延長したり、予約を取り直したり、また入院の必要性について考慮します。診察室でのスタッフの態度やアプローチによって、オーナーが猫を再度クリニックに連れてくるかどうかを決定する可能性があることを覚えておいてください。標準のフォームを使って病歴を確認し、健康診断を実施することは大変重要です（歯の検査と神経学的検査には別のフォームを使用します）。

健康診断の際は以下を参考にしてください:

- 猫を診察する際は決して急がないでください。時間をかけて行えば効果は増大します。「急がば回れ」の典型的な例です。
- 猫が自分からキャリアを出るように誘導します。オーナーから猫の病歴を聞きながら、キャリアのドアを開けてテーブルまたは床の上に静かに置き、可能な場合は猫が自分からケージを出るよう促します（部屋の出口が閉まっていることを確認後）。
- 柔軟性を持って猫の好きなようにさせます。ここで大切なことは猫をよりリラックスさせ、それぞれの猫に合った場所や位置、方法で健康診断を行うことです。オーナーの膝の上を好む猫もいれば、床の上を好む猫もいます。窓から外が見えるところや、



キャリアの中、毛布の下など、猫によって好む場所は様々です。それぞれの猫の好みに合わせ、穏やかに、時間を取って対応します。猫に優しく話しかけ、ただ撫でられているだけではないと猫が気づく前にほとんどの診断を終わらせることが理想的です。

- 猫と一緒に床に座ると楽に猫をハンドリングできます。神経学的検査の場合も同様です。
- 横になるのを好む猫もいれば、立ったままを好む猫もいます。できるだけ猫が好むポジションで診察します。
- キャットフレンドリーの原則を採用し、拘束はできるだけ避けてください。いかなる方法であっても拘束されていることがわかれば、猫は危険を感じます。
- 可能であれば健康診断を2つのパートに分け、1回目が終了したら猫のポジションを変えさせたり、歩き回らせたりします。猫の落ち着きが無くなってきたら、短い時間でも、なでたり、歩き回らせるして休憩を取ります。
- できるだけ猫と目を合わせないようにし、猫があなたから目を離しているすきにできるだけ診察します。目を合わせないといけない場合は、猫を穏やかに見てゆっくりと瞬きをします。

- 検査に必要な場合を除き、大きな音や急激な音（ベルの音やハイヒールの鋭い靴音など）、まぶしい光を避けます。猫に静かにするように「シー」と言わず、自身が出す音にも気を付け、猫には穏やかにゆっくりと、安心させる口調で話しかけます。急な動きも避けてください。
- 高齢の猫は変形性関節症を患っていることが多く、触られると不快感や痛みを感じることがあります。
- 高血圧や甲状腺機能亢進症の猫は不安を感じがちですので、より慎重なアプローチが必要です。
- より侵略的な検査は最後に行います。猫の体温を測ったり（必要な場合に）口を開けたりすることが猫のストレスになる場合は、検査の最後に行います。
- 猫がかみついたり引っかいたりするとオーナーが警告した場合は、オーナーの安全にも気を配ります。オーナーが猫を安全に抱っこしていると安心しないでください。クリニックにいる間のオーナーの安全はクリニックのスタッフの責任です。
- どんなに慎重にハンドリングしても、猫が怖がって必要な検査をすべて行うことができない場合もあります。猫を荒っぽく扱ったりきつく拘束すると事態をさらに悪化させ、猫に大きなストレスを与え、その後の検査がより困難になることもあります。このような場合は科学的拘束の適性も検討し、実行する場合は猫が鎮静状態にある間にできるだけの多くの検査をします（サンプルが必要な場合は摂取する）。
- 診察中に施している処置や検査結果（良性の場合も悪性の場合も）は必ずオーナーに説明し、オーナーと協力して猫に適切な治療 / 管理を決定します。

猫の体重測定

小児用または猫専用の正確な電子体重計を使用し、可能であればすべての診察室に常備します。猫がバスケットに入ったままでの状態で使用できる体重計が便利です（体重測定後に猫を安全な場所に移動させ、バスケットのみの重さを測ります）。猫の体重はみんな同じではありません。成猫の平均体重には大きなばらつきがありますが（通常3キロから6キロの間）例外もあり、若い猫や高齢の猫の体重はかなり軽めです。

病気の猫は体重が軽かったり食欲がなかったりすることがあります。肥満で体重制限のための食事を取っている猫は、その状態によって定期的な監視が必要です。

入院中の猫は毎日体重を測りますが、特定の薬剤を投与する前には薬剤の量を確認するために必ず体重を測ります。（特に鎮静剤や麻酔剤の場合）。健康で若い猫の場合はクリニックでの診察の際に体重を測定するか、少なくとも年に1回か2回測定します。各診察の際に体重の変化率を計算し、記録を取ります（3·3キロの猫の体重が0.3キロ減ったとしてもあまり大きな変化のように聞こえませんが、体重が10%減ったと説明すれば、オーナーも人間の体重変化と比較してより理解できます）。12歳以上の高齢の猫は、少なくとも半年に1回体重を測ります。

猫の入院

猫を入院させる大きな目的は、猫の回復に向けて猫を安全で清潔な、また静かな環境に置き、猫やスタッフにとってなるべくストレスの少ない状況で猫のケアをすることです。

入院中の猫は不安やストレスを感じがちです。トイレやブランケットの下に隠れてその感情を表現します。

猫の入院

猫が入院する前に、できるだけ多くの情報を文書に記録します。以下のような情報が必要です:

- 通常与えている食事の内容と頻度
- 普段使っているトイレと砂の種類
- 毛づくろをしてもらったり（使用する器具と頻度）、撫でてもらったり、遊んでもらうことを好むかどうか
- その他の振る舞い

猫が入院する時は、以下を考慮してください:

- いつもと同じにおいのする通常の環境が猫にとって重要です。家のにおいのするもの（猫がよく使っている衣類やブランケット、寝具など）を持参するようオーナーに提案してください。これを返却することはできないかもしれませんが、それがもたらすメリットをオーナーに説明します。
- 入院したばかりの猫を、騒々しい場所や混雑した場所、犬の近く、他の猫と向き合う場所の床の上に長時間置かないでください。
- 猫をすぐにケネルに移すことができない場合はバスケットにカバーをかけ、床より高く、静かで安全な場所に置きます。

猫用病棟のデザイン

真にキャットフレンドリーなクリニックを実現するには、猫専用の病棟が必須です。猫専用の病棟は入院中の猫のストレスを大きく軽減し、快適な環境を提供します。猫専用の病棟を設置する場合は、ロケーションや広さ、レイアウト、ケージのサイズも大変重要です。

可能な場合、病棟には入院中の猫の体重を毎日測るための電子体重計を一式常備します。体重測定のために猫を移動する必要がありません。入院中の猫の状態を頻繁にチェックし、夜間と時間外のケアの内容をオーナーに知らせます（できれば書面で）。

猫専用の病棟

吠えている犬の上段や隣では猫はリラックスできません！犬と猫の病棟を完全に分けることが最も理想的です。犬と猫の病棟の間にしっかりした壁を設置し、安全のために完全に密閉します。

病棟は平穏で静かな環境を保ち、騒音（洗濯機の音など）が聞こえない場所に設置し、適切な照明と換気、温度調節が必要です。

共有の病棟

小規模のクリニックでどうしても猫と犬を同じ病棟に入院させなければならない場合は、入院中の犬を落ち着かせるために犬用のフェロモン剤の使用をお勧めします。これは猫にとっても効果的です。可能な場合は、犬や猫の通常処置および検査はそれぞれ別の日に時間を変えて予定します。猫の病棟では、犬やその他の猫が立てる音、装置や金属器具がぶつかる音などができるだけ聞こえないようにしてください。うるさい猫がいる場合は、他の猫に聞こえないように別の場所に移した方がいいでしょう。同様に、猫の診察や検査をする時は、他の猫に見えたり聞こえたりしないようにします。

病棟のロケーションと猫の観察

病棟は、混雑して騒音のある場所を通らなくていいように、行きやすい場所に設置します。しかしスタッフが猫を頻繁に観察しやすい場所でなければなりません。入口のドアやステンレス製のシンク、電話の音、その他の混雑してうるさい場所からできるだけ離れた場所が理想的です。臆病な猫や怖がっている猫、また重い病気を患っている猫には静かな場所が必要ですが、観察しやすい場所であることも重要です。ドアや仕切りにガラス製のパネルを設置したり、ガラス製のドアを取り付ければ、部屋に入ることなく猫を観察できます。

病棟の広さ、温度、換気

ケージの数に関わらず、病棟の広さは重要な要素です。猫をケージから出す際に、ケージを動かしても他の猫の目にふれることなく出せる程度の広さが必要です。病棟が処置室の隣でない場合は、猫を診察する台を置くスペースも必要です。この際も入院中の他の猫の目に触れない位置で行うことが大切です。

また、スタッフがケージにあまり近づくことなく作業でき、猫を観察できるスペースが必要です。病棟には冷暖房を完備し、室温は18度から23度に保ちます。病棟は適切に換気し、相対湿度を35%程度に保ちます。

ケージ、ケージのデザインとサイズ

病棟には通常の患者数に適した数（および適したサイズ）のケージが必要です。ケージは楽にクリーニングや消毒ができるように頑丈で不透水性の材質でできており、猫が逃げられない構造のものを使用します。猫が休む床は **ソリッドタイプで**なければなりません。

- 通常ステンレス製が使われますが、ステンレスは猫から熱を奪い、大きな音がします。反射することも猫にストレスを与える可能性もあります。白いガラス繊維でできたケージは猫により快適さを与え、暖かくて騒音もなく、適切に設計されていればクリーニングも楽にできます。
- ケージの正面は、猫を観察しやすくまた脱出や怪我を防ぐために、クリーニングしやすい状態に保ちます。頑丈なガラス製のドアは猫の様子がよく見え、空気感染のリスクを減少し、猫が手を入れたりドアを開けたりできず、怪我をする可能性も低くなります。
- 正面にメッシュを使う場合は、メッシュの大きさを考慮します。小さすぎると猫の様子が見にくく、大きすぎると子猫が頭を入れてしまう可能性もあります。様々なサイズのメッシュを使ったケージの使用を考慮してください。
- ケージの金属製ドアにゴムやプラスチックのストッパーをつけると、ドアを閉める時に大きな音がしません。

ケージを置く位置とレイアウトの重要性:

- 患者同士が目を合わすことがなく、感染粒子の大気拡散のリスクを防ぐ場所にケージを置きます。ケージを隣り合わせ（90度の角度）や向かい合わせに置かないことが理想です
- ケージが直接、または斜めに向き合っている場合は、ケージの一番近い位置が2メートル以上離れているか、ケージとケージの間に不透明のバリアが必要です。
- スペースがある場合は移動式のケージを使用します。ストレスをためやすい猫を一般病棟に入院させる際に便利です。
- ケージを置く高さは、スタッフが猫を観察し、容易に出し入れができる高さ（床上90センチから1メートル）をお勧めします。
- ケージが2段になっている場合、下の段は床上20センチ以上の高さにしてください。猫は床面に置かれるこを好みません。
- 高すぎたり奥行きの深いケージも猫の観察が困難です。ケージの後ろから猫を出す場合は出し入れが難しく（ストレスもためやすい）、スタッフの安全を損なう可能性があります。また適切なクリーニングもできません。

ケージの中の備品

入院中の猫は不安やストレスを感じています。ケージに小さな変更を加えるだけで、猫が住みやすいケージを作ることができます。

- 猫は高い位置を好み、よくケージ内の棚やレッジで休みます。24時間以上入院する猫にとって、ケージ内の棚は大変役立ちます。長期に入院する猫には作り付けの棚のあるケージが理想的ですが、段ボール箱などを逆さに置くと猫が箱の中や上に座ることができます。十分な広さがあるケージの場合は、猫のキャリアをケージの中に置くことも一つの方法です。この場合、キャリアのドアは開けておくか、取り外します。
- 短期または長期入院用に各種サイズのケージが病棟にある場合、日帰りの猫には小さいケージでもかまいませんが、トイレ、ブランケット、食べ物用と水用の容器は必ず必要です。去勢や不妊手術、また歯科治療などの簡単な処置のために日帰りで入院する猫は、ケージにいる時間は短いですが、麻酔から安全に回復するために体や首を十分にのばすことのできるスペースが必要です。24時間以上入院する猫には、ケージの中で自由に動き回れるスペースが必要です。
- ISFMが提案する猫用ケージの**内側のサイズは** 以下の通りです（幅 x 奥行き x 深さ 単位＝センチ）：
  - 外来と24時間未満の入院：床面積が3600平方メートル（例：60 x 60） x 55cm
  - 24時間以上の入院：床面積が6300平方メートル（例：90 x 70） x 55cm （最低サイズ）

- 快適で暖かく、衛生的で柔らかい寝具を使ってソフトなサーフェスをつくります。タオルやブランケットも使用できますが、水分を吸収してしまうので、重くなってきたら新しいものと取り替えます。古い新聞紙を敷くだけでは十分ではありません！寝具でケージの底を完全に覆いますが、特にステンレス製のケージの場合は必ず覆ってください。
- 入院中の猫はよく隠れたがります。猫が安心できるように、ベッドの下に完全に隠れるのではなく体の一部を隠せるようなものを入れておきます。使い捨ての段ボール箱や、市販のイグルータイプまたはサックタイプのベッドなど、いろいろな方法で猫が隠れる場所を作ってあげます。
- タオルを使って猫を拘束する場合、拘束する前にタオルをケージの中に入れておくと猫自身のにおいが移ります。家庭で使っているベッドや衣類をオーナーに持参してもらえば、慣れたにおいで猫が安心できます。
- ケージには適切なトイレを入れるスペースが必要です。クリニックにはそれぞれの猫に合った各種サイズのトイレを準備します。プライバシーを好む猫もおり、カバーの付いたトイレや、箱を横向きにして中にトイレを置くのもいい方法です。
- 尿のサンプルが必要な際には、非吸収性の猫砂（市販の非吸収性の砂粒や清潔な水槽用砂利）を使用します。
- 体温の維持が必要な場合に備えて適切な装置を準備します。ケージに床下暖房があれば理想的ですが、ヒートパッドの上にベッドを置いても効果的です（動けない猫がやけどをしないように気を付けます）。電子レンジで温めるタイプのベッドやウィートバッグなども便利ですが、熱すぎてやけどをさせないように気を付けてください。湯たんぽも使用できますが、お湯が冷めて湯たんぽが冷たくなってしまうと猫から熱を奪ってしまします。
- ケージ内の食べ物および水の容器とトイレは、なるべく離して置いてください。トイレを片隅において、反対側の隅の食べ物や水の容器を置くことをお勧めします。食べ物の容器と水の容器も離れた場所に置ければ理想的です。
- 食べたり飲んだりする時に猫のひげが容器の内側に当たらないように浅い容器を使い、プラスチック製の容器は避けてください（においがつく可能性があります）。浅めのセラミック容器が最も適しています。
- 24時間以上入院する猫のために、猫が好む使い捨てのおもちゃ、または楽に洗浄して消毒できるおもちゃを用意します（特に子猫や若い猫のために）。
- ケージの中に必要なものが揃っているにも関わらず、何らかの原因で猫がストレスを感じ始めた場合は、ケージの正面全体または一部をタオルやブランケットで覆うと猫

のストレスを軽減することがあります。ケージを覆った場合は猫を観察する方法を考えなければならず、頻繁に観察する必要のある猫のケージを覆うことは得策ではありません。ケージを覆った場合でも **ケージの中には**猫が隠れる場所が必要です。

入院中の猫の状態を頻繁にチェックし、夜間と時間外のケアの内容をオーナーに知らせます（できれば書面で）。

猫の病棟に関するさらなる注意点

- 猫の病棟には手を洗ったり消毒する設備が必要です。
- また病棟内に容器やトレイを洗って消毒する設備も必要ですが、これはトイレを洗ったり消毒する設備とは別にしなければなりません。
- 食べ物の保管や調理場所は、食べ物や水の容器、トイレなどを洗って洗浄する場所とは別に設置します。これは感染性病原体の二次汚染を防ぐために大変重要です。
- 猫に適した食品を揃え、新鮮な食事を調理する設備や冷蔵保管庫が必要です。
- クリニック内で猫を移動させるには、その猫専用のキャリアを使用します。家庭で使っているキャリアでもクリニックのキャリアでもかまいませんが、他の猫に使う場合は必ずきれいに洗浄して消毒してから使ってください。

入院中の猫の識別と監視

- 入院中のすべての猫は、使い捨ての首輪をつけたりケージやバスケットに表示をして明確に識別します。
- 入院中の猫には、クリニックのフォーム（チャート）に時間と担当スタッフのイニシャルを添えて詳細を入力します。フォームには、痛みや素行、ストレスの評価を記入してください。記録する内容は以下を含みますが、これに限定されません:
  - 生命兆候（体重を含む）
  - 治療
  - 食べ物と水（与えた時間と摂取量）
  - 排便（時間、量、特質）
  - 排尿
  - 臨床兆候
  - 行動や振る舞い
  - 痛みの評価
  - ストレスの評価
  - 点滴など
- 獣医師はそれぞれのパラメータをどの程度の頻度で監視するか、またどのような場合に投薬するか（投与量と方法も含む）を明確に指示します。
- 複数の治療が必要な猫には別々のフォームを使用します。
- 入院中の猫の状態を頻繁にチェックし、夜間と時間外のケアの内容をオーナーに知らせます（できれば書面で）。
- 資格を持った獣医師が少なくとも毎日一回、入院中のすべての猫を診察することが理想的です。

入院中の猫に必要なその他の設備

- 入院中の猫のための酸素補給装置
- お風呂に入れて乾かし、毛づくろいをする道具
- 点滴剤（コロイドおよびクリスタロイドを含む）と猫に適したカテーテル、投与セット。猫は脱水状態になりやすく、必要な場合はすぐに点滴をします。心機能に障害が

あったり、急性腎不全を患っている場合は、過度の点滴に注意しなければなりません。投与する点滴剤の量を調整する点滴ポンプやシリンジポンプ、またビュレットなどの器具を常備します。シリンジドライバーやシリンジポンプは一定量の薬剤を投与する際にも使用できます。

- 数日以上点滴を続ける場合は、長期用の静脈内カテーテルを伏在静脈や頸静脈に入れると静脈ラインが維持できます。

感染症の管理と隔離施設

感染症や伝染病は猫の間で広がりやすく、ストレスを抱えている猫は病原菌を発散しやすくなります。

- 部屋やケージ、ベッドや器具などを十分に洗浄および消毒して、二次汚染を最小限に抑えることが重要です。
- 猫の病棟は毎日掃除および消毒しますが、長期に入院する猫にとっては慣れたにおいを保つ大切です。寝具が汚れていない場合はそのまま使用します。
- 次の猫を入れる前にケージを十分に洗浄および消毒し、ステンレス製のドアの場合は柵も忘れずにきれいにします。
- 食べ物と水の容器は次の猫に使用する前に洗浄および消毒します。
- 各種器具（体重計、体温計、耳鏡、テーブルトップなど）も次の猫に使用する前に十分に洗浄および消毒します。
- キャリアおよびベッドも次の猫に使用する前に十分に洗浄および消毒します。
- 猫の使用に適した殺菌剤を使用します（フェノールは使用しない）。
- 感染症および人獣共通感染症にかかっている猫の隔離には、別々の隔離病棟が必要です。クリニック内での二次汚染を防ぐためには、独立した病棟で入り口が別になっていることが望まれます。隔離病棟の猫には集中看護が必要です。注意深く監視するためには他の施設からあまり離れていない場所に設置する必要がありますが、中がよく見えるようにガラス製のドアがついた小さい部屋にケージを1つか２つ置くだけでも十分です。

- 隔離部屋には専用の洗浄および消毒設備を設けることが理想的です。中で使用する器具や洗浄用具などは隔離部屋に保管してください。
- 適切な殺菌剤を入れた足洗い用のたらいを隔離部屋の外の置き、使い捨てのエプロンや衣類、手袋、マスク、靴カバーなどの保護具を使用します。
- 可能な場合は強制換気システム（負圧）を設置します。
- 衛生について厳格な手順と採用し、スタッフ全員が従います。隔離病棟に入るスタッフの数を厳しく制限し、猫が十分なケアを受けられるように隔離病棟担当のスタッフを決めます。
- 専用の隔離施設がない場合は、持ち運び用ケージに猫を入れて、適切に消毒した場所に置きます。

入院中の猫の食事

入院中の猫や病気の猫は、痛みや吐き気、脱水症のために食欲不振になりがちで、栄養不良は疾病や死亡の大きな原因となります。

- 猫の体重は毎日測り、少なくとも週に2回か3回は身体や筋肉の状態をチェックします。
- 各猫に必要なカロリー量を計算し、食物摂取を監視します。
- 可能であれば猫が家庭で好んで食べているものを与えます。
- 入院中の猫には栄養があって口当たりの良い食べ物が必要です。高タンパク質で高脂肪のもの（Royal Caninの食品を参照）が食べやすく、 ウェットな食べ物（缶詰や小袋入り）は体温を温めます。
- 食欲のない猫は、全身疾患や脱水症の可能性や吐き気があるかなどを調べ、食べ物を嫌がるようになる前に症状を改善する治療をします。
- 環境面でのストレス（犬や騒音、においなど）を軽減します。
- 食べ物はトイレから離れた場所に置き、スペースがあれば水の容器からも離します。

- 口当たりのよい少量の食べ物を手で与え、猫の食欲をそそります。猫が食べるまで辛抱強く時間を掛けます。
- 少量の食べ物を頻繁に与え、食事と食事の間（または与えてから一時間後）は食べ物の容器をケージから出します。
- 食べ物の種類が多すぎても猫には良い影響を与えません。2種類程度にとどめ、食欲がない場合は後で別の食べ物を与えてみます。
- ドライフードを好む猫もいますので、ドライフードも与えてみます。
- それでも食欲のない猫には、食欲促進剤（シプロヘプタジンやミルタザピンなど）の投与を考慮してください。
- シリンジを使うと食物嫌悪を誘発したり悪化させたりすることがあり、吸入性肺炎を引き起こすことがあります。
- 3日から5日以上食欲がなかったりカロリー摂取量が十分でない場合、また3日以上食べていない場合は、経腸栄養（チューブを使用）を検討します。

- 経鼻栄養チューブは短期の栄養補助に大変役立ちます。この場合は特別に処方された流動食を使用します。長期にわたる栄養補助には食道瘻管または胃瘻管が適しており、混合食品をはじめ幅広い種類の食物が摂取できます。

手術室と麻酔

無菌の環境で外科処置を行うためには専用の手術室が必要です。可能な場合は手術前に別の部屋で麻酔をかけ、剃毛します。

手術室は以下の要件を満たすことが重要です:

- 室内のサーフェスと手術台は、楽に汚れを落として消毒できる
- 外科手術に必要な器具のみを備え（必要な場合はX線装置も）、その他の設備や備品などを保管しない
- 手術台を照らすための十分な照明がある
- 手術室専用の手洗い設備があり、できれば手術室の外に設置する
- X線写真を表示する設備
- 無菌の外科処置以外の目的で使用しない

様々な状態の猫（子猫や各種疾患を患う猫）に麻酔をかけて維持する適切な設備が必要です。適した麻酔剤や鎮痛剤を使用して、麻酔のリスクを最低限に保つことは獣医師の責任です。以下のような設備が適しています:

- 酸素供給装置
- 心臓蘇生装置
- 各サイズの気管内チューブ（カフつきとカフなし）誤嚥のリスクが高い処置（歯科処置など）を除いて、器官を損なう恐れの少ないカフなしのチューブが適しています。
- 赤いゴム管よりシリコンの気管内チューブの方が、喉頭への刺激が少なくなります。
- 挿管前の咽頭の麻酔に適した、猫用サイズの咽頭鏡と局所麻酔薬
- 揮発性麻酔薬を使用する場合は、温度補償式気化器を使用します。

- 吸入麻酔剤を使用する場合は、猫に適した麻酔回路（Tピース回路や猫に合ったサイズのフェイスマスクなど）が必要です。
- 猫の体温を維持するもの – 温かいエアブランケット（Bair Huggers™など www.arizant.com）が大変優れています。電子レンジで温めるヒートパッド（Snugglesafe™ Microwaveable Heat Pads）はより安価な代替オプションです。
- 必要な場合は点滴剤を適度な温かさに保ちます。
- 猫が麻酔を受けている間は研修を受けたスタッフが生存兆候を綿密に監視し、麻酔チャートに定期的に記入します。麻酔チャートに記入する内容:
  - 日付、担当者、処置、期間
  - 猫の詳細情報（ID、体重）
  - 誘発剤、維持剤と投与量
- 麻酔チャートには以下の生命兆候を定期的に記入します:
  - 体温
  - 呼吸数
  - 心拍数 – 聴診器、食道聴診器、ECGなどで測定

- 末梢血管脈拍数と脈の状態
- パルスオキシメトリ（猫に適したサイズのプローブのついたもの）
- 血圧測定器 - オシロメトリック式は麻酔のかかった猫には適していますが、意識のある猫の場合は正確に作動しません。ドップラーおよびHDO機は意識のある猫にも麻酔のかかっている猫にも適しており、正確に作動します。カフの幅は手足の周囲の30%が適しています（成猫の場合は約2.5センチ）。
- 可能な場合はカプノグラフ
- あらゆる合併症

麻酔後の回復時は適切な研修を受けたスタッフが綿密に監視します。

手術器具

クリニックで行う様々な処置用に、適切な手術器具および緊急処置用の器具が必要です。

手術器具は、使用前に適切な殺菌剤を使って殺菌します。手袋や手術着も殺菌し、適切に使用します。

手術器具は十分に手入れし、定期的に品質管理をして正確に作動するかをチェックします。

多くの猫は歯の疾病を患っており、高水準の歯科処置を行うための歯科用器具が必要です。以下の方法で歯の手入れをします:

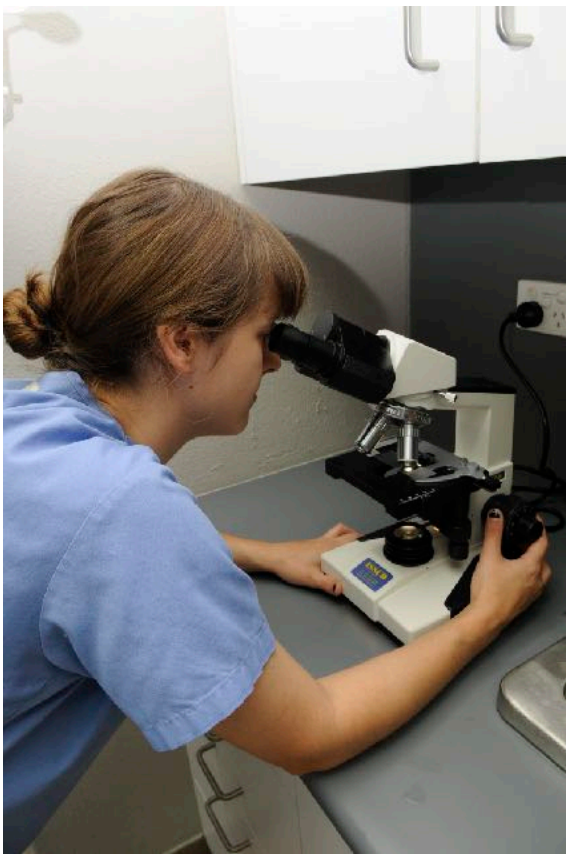
- 歯や口腔のケアの重要性をオーナーに説明する
- 健康診断の際に口内検査を行う
- 必要な場合は麻酔をかけて歯科検診を行う（通常検診で異常が見つかった場合など）
- 歯科レントゲン写真を撮る（口腔内のノンスクリーンのレントゲン写真が理想）
- 正確な歯科記録とチャートを保管する

以下を含む歯科器具を準備します:

- スケーラー、キュレット、歯周プローブ、以下のような昇降機またはラクスエーターなど:
  - Superslimエレベーター

- Couplands#1エレベーター
- 抜歯鉗子パターン76N

- 器具は先がとがっていることを確認し、適切に保管します。
- 歯科用の保護具には、エプロン、マスク、ゴーグル、使い捨て手袋などを準備します。
- 機械的に歯石を取り、歯を磨き、切開し、抜歯をする設備が必要です。手術の際には冷却水を準備します。高速で空気駆動式の設備をお勧めします。
- 小型で丸い摩擦切削器具を1つか2つ揃えることをお勧めします。
- 歯科用器具は、次の猫に使用する前に適切に手入れをして消毒および殺菌し、病気の感染を防ぎます。



画像診断

適切な設備を揃えたキャットクリニックには、緊急時に対応するために、診断可能なX線写真を撮影する装置が必要です。電離放射線の人への照射をできるだけ避けるために、鎮静状態や麻酔のかかった猫を適切な位置に固定する各種サポート器具や拘束器具も必要です。

X線の記録はすべて慎重に保管し、X線写真には不正加工できない方法でラベルを表示します。超音波診断気をクリニックに常設するか、または必要な場合はすぐに使用できるよう手配をしておくことが理想的です。

ラボの設備

猫を適切に監視するために、以下を含む基本的なラボ設備を常備します（Idexxレンジを参照）：

- 臨床顕微鏡

- 血液塗抹標本や、体液 / 組織の塗抹標本を準備するための設備
- PCVを評価し、血清 / プラズマを収集して尿沈渣の分析をする遠心分離機
- 血糖の濃度を測定する装置
- 血中尿素の濃度を測定する装置
- 尿や血清 / プラズマの比重を計算する装置（適切な屈折計など）
- 尿の基本的な化学分析を行う装置（尿ストリップなど）

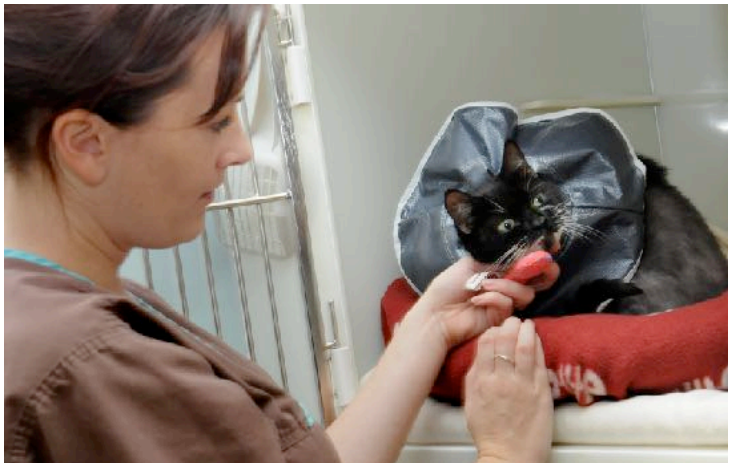
手術器具は十分に手入れし、定期的な品質管理を行って正確に作動することを確認します。

クリニック内のラボで様々な検査を実施できることが理想ですが、その設備がない場合は、ある程度の検査を依頼できるよう外部のラボに手配をしておいてください。クリニック内のラボで検査をする場合は、以下が重要です:

- 使用する装置の制約を理解する
- 器具は適切に維持し、校正する
- 品質管理チェックを行う
- 正確な結果を出すために、適切な研修を受けたスタッフが使用する

医薬品

猫の治療に使用する認可医薬品の種類は、国によって大きく異なります。メーカーの使用説明書に従って各種の医薬品を取り揃え、適切なラベルを表示してください。法的規制は順守しなければなりませんが、猫への使用に承認されていない薬剤を使用する場合も出てきます。その際は、事前にオーナーからインフォームドコンセントを得ることをお勧めします。



猫への毒作用に関する情報が必要な場合に備え、すぐれた情報サービスへすぐにアクセスできる準備をしておきます。Veterinary Poisons Information Service （獣医毒物情報サービス　www.vpisuk.co.uk）は世界各地でサービスを提供しています。

キャットフレンドリークリニックの実現

本マニュアルでご紹介したほとんどは高額の費用がかかるものではありません。機器や建物に関する推薦事項と同様に、アプローチや組織、姿勢に関する推薦事項も多く含まれています。小さな積み重ねが大きな改善につながっていくのです。キャットフレンドリーを実現したクリニックからのコメントをご覧ください:

> 「キャットフレンドリークリニックの実現に向けた努力が認められて、新規のオーナーが来院してくれるようになりました」
>
> 「当社は大規模なレフェラルセンターです。クリニックの各分野に勤務するスタッフが、キャットフレンドリーなクリニックの実現に向けて努力を続けています。その効果は非常に大きく、スタッフ全員が猫の感じる不安がもたらす影響を理解し、ストレスを和らげるための改善策に取り組んでいます」
>
> 「当クリニックは猫専用の駐車スペース、猫と犬を別々にした待合室、猫専用のケネル病棟を設置しました。キャットフレンドリーなクリニックを実現したことを大変誇りに思っています。診察室での猫の扱い方や処置の際の拘束など、すべての面においてキャットフレンドリークリニックの信条に従うことができるようになりました。そのおかげで、当クリニックに来院する猫は以前よりかなりリラックスし、落ち着いています」
>
> 「徹底したキャットフレンドリーの方針に従う当クリニックは、猫の特別なニーズに対するクリニックの知識と理解に感銘してくださったオーナーから、絶えずフィードバックを頂いています。入院中の猫も以前に比べ落ち着いており、ケアもしやすく、リカバリー後も安定しています。高齢の猫の血圧測定などでもより正確な結果が出せるようになりました」
>
> 「キャットフレンドリーを実現したことは、猫への様々なケアに関する認識や猫を看護する際の要件において、オーナーおよびスタッフの視点から見ても当クリニックに良い影響を与えました。猫の立場になって考えることによってよりクオリティの高いケアができ、実務を設計する際も様々なアイディアを利用しました」
>
> 「キャットフレンドリーなクリニックの実現で多くのオーナーや猫たちが恩恵を受けています。週1回の猫オンリーのクリニックも喜んでいただいています。猫が落ち着いてきて、クリニックに来院する際のオーナーと猫のストレスが大きく軽減されました。低い照明と*Feliway*プラグインを取り入れた猫専用の病棟が、入院中の猫に穏やかな環境を提供しています。ケネルの中には隠れる場所を作り、おもちゃも与えています」

ISFM キャットフレンドリークリニックプログラムの公式パートナー

キャットフレンドリークリニックの実現に向けた本ガイドは、International Society of Feline Medicine（ISFM - 国際猫医学会)が提供し、動物クリニックでの猫の福祉に関するISFMの基準に基づいて作成されています。

ISFM（国際猫医学会）は、慈善団体であるインターナショナル・キャット・ケア（www.icatcare.org）の獣医学部門です。

猫とオーナーに配慮を示す
オンラインリソースをソリューションを表示
ISFM キャットフレンドリークリニックを
実現
www.catfriendlyclinic.orgをご参照ください。
… ISFMがお手伝いします。

Official partners of the ISFM Cat Friendly Clinic programme

キャットフレンドリークリニック

猫、オーナー、あなたのビジネスにとってのすぐれたソリューション